魔法少女リリカルなのは～転生者は暴言ばかり～

ジグザグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～転生者は暴言ばかり～

【Ｎコード】
Ｎ１６９９Ｎ

【作者名】
ジグザグ

【あらすじ】
車に轢かれてテンプレ的になのはの世界に迷い込んだ主人公。原作知識ゼロ　チート能力　そして、口は非常に悪い。しかも頭に住み着いた天使から突然なのはを殺せと言われてしまい……

1話　転生者は暴言者（前書き）

勢いだけで書いてしまった……

「天使」の方を優先で書くと思うので執筆速度は遅めです……

「天使」とはまた違ったテイストですがお楽しみいただけたらと思います。

1話　転生者は暴言者

車に轢かれました。

意識が遠のいていきました。

そして目が覚めたら……

そこは異世界でした。

「なんだ！このテンプレ的展開！！」

魔法少女リリカルなのは　はじまります！

◆

そんなこんなで行くあてもない俺は彷徨っていた。

辺りは閑静な住宅街といった感じで、今はもう真夜中だ。

「つーかなんだよ、異世界ってなんだよ。意味わかんねーよ」
なんでもここは異世界らしい。
誰に言われたわけでもないけど、頭が理解している。
ご都合主義ってやつだな。
「あ～、もう意味わかんね、マジ意味わかんね」
『ったく！ぐちぐち五月蝿いですね。あれですか馬鹿ですか』
頭の中で突然若い女の声がする。
「うおっ！なんじゃこりゃ。うぜぇ、マジうぜぇ。ぶっ飛ばすぞコノヤロウ」
『殺れるもんなら、やってみろやー！！』
「ああ！舐めてんじゃねえぞクソビッチ！」
『はっ！たかだが人間ごときが私に歯向かうなど！！』
瞬間、強烈な頭痛に襲われる。
「痛え！マジ痛え！！てめえの仕業かこの野郎」
『私は野郎じゃない！！口の利き方に気をつけろ！！』
「クソっ！！へいへい分かりましたよ。仰せのままにクソビッチ様」

『ちっ！天使に向かって何てやつ』

「天使だったら舌打ちなんかしてんじゃねえよ！」

『うっさい！！ボケ！！カス』

「あぁん！ドブスがうっせえぇんだよ」

『アンタわたしの顔見えないでしょーが！！』

「ばっか、お前アレだよ。心の目ってやつだよ。感じるんだよ。てめえの醜さをな」

『嘘つけ！ヘタレ』

「誰がヘタレだ！！適当な事言ってんとぶっ飛ばすぞコノヤロウ」

『うっさい！！』

頭の痛みがその強さを増す。

「うぉぉぉ！！！頭が割れるように痛えぇ！！！！！」

『はっ！立場が分かりましたか人間』

勝ち誇ったような声が、頭の中に響き、痛みが和らいでいく。

「はぁはぁ……んで、なんなんだよここは？つーかてめぇ誰だよ？」

『はぁ……口の悪さは変わんないわけね……ここは異世界。私は天使。あんたは奴隷。分かった？』

「わかんねぇよ！！特に最後の意味わかんねぇよ！」

『ちっ！これだから馬鹿は……ようは私に従えって事よ』

「あぁん！なんで俺がてめえに従わなきゃいけねぇんだよ！？」

『いいから！早くしないと始まっちゃうのよ！！』

その時、空を裂くようなピンク色の光が見えた。

「……なんだありゃ？」

『しまった！間に合わなかった！！』

「あぁん？」

『早く行け！馬鹿！！』

「ちっ！命令してんじゃねえよ」

文句を言いながらも、現場に向かうとそこは謎の化け物が少女を襲っていた……

「おい！なんだこの超展開は！！」

「ふぇっ！？」

頭の中の天使とやらに叫んだのだが、反応したのは思いがけず襲われていた少女だった。
少女は魔法？みたいなもので防いでいたが、辺りの建物はかなり壊されている。

『聞きなさい、あんたはこの娘を』

「ちっ！助けりゃいいんだろ」

最後まで聞かずに少女の下へ走り出す。
状況は分からんが、あの化け物から危険な感じがする。

「おい！大丈夫か！！」

『馬鹿、違うわよ』

「なに？」

『あんたはこの娘を――殺しなさい』

1話　転生者は暴言者（後書き）

やっちまった感が強い……

感想……待ってます

2話　暴言者の決意

『あんたはこの娘を――殺しなさい』

突然脳内天使がふざけたことを抜かしてきやがった。

「は？お前なに言っちゃってんの？」

『はぁ……説明は後でするから』

「あほかっ！今しろ、すぐしろ、むしろ死ね！！」

『死ぬかっ！……まぁいいわ、とりあえずアレなんとかしなさい』

天使の気配があの謎の物体に向く。

『あんなんがいたんじゃ落ち着いて話もできないでしょ』

「ちっ！そりゃそうだが……どうしろっつうんだよ？俺はあいにく一般人なんだよボケ」

『ボケはあんたよ！今のあんたならあんな奴楽勝だから。……イメージしなさい』

「イメージ？」

『そう。あんた漫画とかアニメとか好きでしょ？なんかそういうの技とか魔法とかイメージすれば大抵できるから』

なんだそのチート能力は……いやむしろお約束か？

『早くしなさい！こっち来るわよ！！』

「うおっ！マジかよ」

「危ない！」

「逃げてください！！」

なんか後ろの少女……とその横にいたフェレットが喋ってるんだが……

「まぁいいか、……イメージ……イメージねぇ」

とはいえ咄嗟にんな事いわれても悩むな

『だぁぁぁぁ！！早くしなさいよ！！！』

なんかもうすぐ目の前に化け物がいた。

「焦らすんじゃねえよ！あぁもうウゼぇ！！」

そして突進してきた化け物は俺の身体に当たり……吹っ飛んだ……

化け物が空に舞う

「おぉ、すげえ」

『……なにしたの？』

「あぁん？反射だよ」

『反射？』

「全てを反射するという限りなく無敵に近い能力」

『……それなんて反則？』

……反射というかベクトルの変更だっけか？まぁどっちでもいいが、やっぱり一方通行はどう考えても卑怯すぎるよな。

どうやら化け物はさっきの衝撃でそうとう弱っていたらしい、いつの間にか少女が封印？とかいうのをしようとしている、

……なんかやたら可愛らしい呪文が聞こえてくるが……まぁいいか、少女と謎のフェレットが向こうにいってる間にこっちの話を先にやっとかねえとな。

「さぁ話せ　さっさと話せ　きりきり離せ」

『……次元の修正力の侵攻を防ぐためよ』

「はぁ？んだそりゃ？日本語でしゃべれやクソ天使」

『あぁ！！もう！！いちいちむかつくわねアンタ』

「うるせえよ、さっさと話しやがれぶっ飛ばすぞコノヤロウ」

『はぁ……あんたがこの世界に転生したせいで、この世界にありえない程の力が集まったのよ。それを修正しようとするのが次元の修正力』

「あぁん？じゃあ俺がどこかにいけばいい話じゃねえのか？」

『……無理よ。今のあんたは魂が強すぎてもう他の世界に転生はできないし、死ぬこともできない』

不老不死ってやつか？

「じゃあなんでそいつを殺すとかいう話になんだよ？」

『彼女は今後この世界で重要な役割を持つわ。本来であればそれはいい事なのだけど……アンタとこの娘。いえ、この娘たちが一緒の次元にいることで、ただでさえ目立つのがより一層目立ってしまう……修正力がこの次元を消そうとしても不思議じゃない』

「目つけられるって訳か……」

『そうよ、アンタを殺す事はできない……だからせめてこの娘を殺しなさい……そうすれば修正力の力は多少弱まるわ。それならアンタの能力でなんとか防げると思う……本来は私があの娘殺るべきなんでしょうけど……天使や神は人への干渉ができないから……』

「はぁ？俺には干渉してると思うんだがな」

『アンタは特別よ……元々が私たちとは違う別の次元から来た魂だからね』

「まぁいい、話は分かった」

『……そう……じゃあ』

「だが断る！！」

『はぁ？アンタ話聞いてた？？』

「用はそいつら、次元の修正力か？その侵攻をふせぎゃあいいんだろ？」

そう、たったそれだけの簡単な話、なんでわざわざそんなややこしく考えるかね

『……そうだけど……』

「俺はやりたいようにやる、クソ天使の指図なんか知るかよ」

『それでこの次元が滅んでも……？』

「はっ！んなもん知るかよボケ！！」

『……っ！』

知らねえやつの事なんて気にしてられっか。

一々気にするぐらいだったらな

「俺が全部守ってやればいいんだろうが」

2話　暴言者の決意（後書き）

次回からはなのは達とも接触していきます（予定）

……正直話を大きくしすぎたような……

3話　暴言者と脅える娘

「あ、あのっ！」

「あぁん？」

いつの間にこちらに来ていたのか、後ろから突然声をかけられ少女の方を振り向くと

「ひっ…」

何故か涙目になっていた……

『アンタ……なに怯えさせてんのよ』

「ちっ……めんどくせえ」

「ご、ごめんなさい……」

『だからやめろって』

「どうしろっつーんだよ……」

『わざわざ声に出さなくても心の中で思えば私には伝わるから』

「……それを早く言え」

なぜだが知らないが俺の顔は怖いらしい。

特に目つき……黒目が小さく、白目の部分が多い……所謂三白眼っ

てやつで、周りからは人殺しの目だなとか言われたもんだ……泣いていいか……

しかも身長が１９０ｃｍもあるから目立ってしょうがない……こちとら１８歳の高校生だってのにそこらのヤクザみたいな連中が喧嘩ふっかけてきたもんだ。

っと、物思いにふけっていたら本格的に泣きそうになってきたな。ガキは苦手なんだが……

「……ったく」

俺はしゃがみこみ、少女の目線に合わせてやると右手から饅頭を出した。

――これやると腹へるんだったな

「ほれ、食え」

「……え？」

「え？じゃねえよ、えじゃねえよ。食えっつってんだよ」

「は、はい！」

『アンタは泣き止ませたいのか、怖がらせたいのかどっちなのよ……』

『あぁん？ガキなんざ菓子でもやっときゃ泣き止むって決まってんだよ』

『……しかもむき出しって……怪しすぎるわよ』

『しゃあねえだろ。そういう魔法なんだよ』

「あ、あの！」

「あぁん？」

「ひっ……あ、あの」

俺は黙って少女の言葉を待っていると、勢いよく頭を下げてきた。

「ありがとうございました！」

「おぉう」

やたら大きい声に思わず引いてしまった

『ほら、こんな可愛い子がお礼いってるのよ。なんか気の利いた返事してあげなさいよ』

『うるせーよ。俺はロリコンじゃねえんだよ』

『いいから早く！ずっと待ってるじゃない』

『さっきまで殺せとか言ってたやつとは思えんセリフだな』

まぁいい、とりあえず目の前の事をなんとかしねぇとな

「まぁ……なんだ……その……お疲れさん？」

『……アンタ……それは無いわ……』

「あ、は、はい。お疲れ様です！」

そういってまた勢いよく頭を下げてくる少女

そういえばフェレットは少女の手に抱かれてぐったりしているが

「おい、そいつは？」

「あ、なんか安心したのか寝ちゃいました……怪我もしてたので……」

まぁいいか……つーかこいつは、いつの間に着替えたんだ？

「おい」

「あの」

声がかぶる

「ちっ！」

「ご、ごめんなさい、さ、ささきにどうぞ」

「なんだよ、先に言えよ」

「え、えっと、でも」

「先に言えっつってんだよ、ぶっ飛ばすぞコノヤロウ」

「ははははいっ！」

『……アンタは子供相手でも容赦ないのね』

『あぁん？ちゃんと優しく接してんだろうが』

『……どこがよ』

「あ、あの……ここにいるとまずいのかなぁ……なんて」

「あ～、……そうだな」

辺りはぼろぼろになってるしな……電柱なんか倒れてるし

「色々聞きてえ事あんだが……こんな時間だしな。明日は時間あるか？」

「あ、はい。学校があるので放課後なら」

「うっし、決まりだな、おい家どこだ？」

「あ、え、えっとここを真っ直ぐいって……」

「ちげぇよ。送ってやるっつってんだよ」

「……え？」

「だから、え？じゃねえよ、さっさといくぞ」

「あ、はい！」

『へぇ。優しいねぇ』

『うるせぇよ。にやにやしてんじゃねえよ。死ねボケカス』

『……アンタは』

「あの！」

「あぁん？」

「ありがとうございますっ！」

……なんか初めてこいつの笑顔を見た気がするな

「私なのはって言います。高町なのは」

「ちっ！」

『いや……返事がちっ！ておかしいでしょ……名前教えてあげなさいよ』

「……如月千早（きさらぎちはや）だ」

「あは！如月さんですね♪」

なにが嬉しいんだか……

「おい」

「なのはです」

「……おい」

「なのはです」

「……おい」

「なのはです」

コノヤロウ……笑顔で調子にのってんじゃねえぞ

「ちっ……あ～、なのは」

「はいっ！如月さん！」

「家は近いのか？」

「はい、もうすぐそこです」

着いた先はなかなか立派な家だった

「ここか？」

「はい、えっと、送ってくれてありがとうございます」

「……あぁ」

「えっと明日は？」

「あ～そうだな、この辺に公園とかあるか？」

「公園ならここを……」

公園の場所を聞くが、この辺の地理が分からんからな……海鳴臨海公園とかいう名前だけ覚えたからなんとかなんだろ

「あぁ、分かった。そこに来い」

「あ、えっと時間は」

「心配いらん。どうせずっといる」

「え？」

「公園のベンチで寝てるかなんかしてる」

「あ、あの、お家は？」

「無い」

「えええぇぇぇ！！！」

「……うるせぇよ……ぶっ飛ばすぞコノヤロウ」

『……なんか覇気なくなったわね』

『……今更ながら公園に住む事に絶望しただけだ』

「なのは、帰ったのか？」

「あ……お兄ちゃん、お姉ちゃんも」

『行くぞ』

『え？いいの？』

テレポートでさっき怪物と戦った場所へ飛ぶ、レベル４はさすがだな……あの百合属性はどうかと思うが

『放っておいてよかったの？』

『面倒事はきらいだからな』

辺りを見渡すと相変わらずぶっ壊れている

「ちっ……我は癒す斜陽の傷痕」

壊れた壁や道路、電柱が元に戻っていく。

「こんなもんか」

声が届かない範囲には効かないがな

『これからどうするのよ？』

『寝る』

とりあえず公園探すか……この年でホームレス……早いとこなんとかしねえとな

4話　暴言者と公園で（前書き）

何やら一部文章が乱れていますが仕様です。

……読み飛ばす事を推奨します……

4話　暴言者と公園で

「……！……！！……」

公園のベンチで寝ているのだが……なんだか外がうるさい。
公園なんだから煩いのは仕方ないだろうが、それでもイライラするのは止められず、反射を使い音を聞こえなくする。

昨日は公園が中々見つからず苦労したせいか随分と眠い。
ちらりと一瞬だけ目蓋を開くと、外は早朝といった感じだった。

『あー、アンタの気持ちも分からなくはないけど……今は起きたほうがいいと思うよ』

『……うるさい……俺の睡眠を妨害するな』

『まぁ、うん。そういう反応するんだろうなぁとは予想の範囲内なんだけど……ね』

『ちっ……ぐちゃぐちゃうるせぇな……言えよ……ぶっ飛ばすぞコノｚｚｚ』

『だから寝るなって……そろそろ泣きそうだよ……』

『お前が？ハッ！なんだよ、それならそうと早く言えよ。お前の不細工な泣き顔見るためなら喜んで起きてやるぜ』

『うん……わかった……もう何もいわない……おやすみ』

脳内天使が諦めたように気配を消していく。
なんだよ……逆に気になるじゃねぇか。
そう思い、目を開けると
……
……
……
……
……泣きそうなガキがそこにいた
◆
ガキはこちらが起きたのを見るとぱくぱくと金魚のように口を開いている
――なのはだったか……そういや昨日会う約束してたな。
「学校は終わったのか？」
しかし、こちらが聞いても向こうは口を開けるだけで声に出さない。

――こいつ！俺を馬鹿にしてるのか！？

ふつふつと怒りが全身に満ちてくる。俺を馬鹿にするとは……

脳内でなのはとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしていると天使が邪魔をしてきた。

『アンタ……反射切りなさいよ』

む、そういえば失念していたな。成るほど、馬鹿にしてたのはこいつではなく俺だったのか。

――なら問題ないな

『ありすぎでしょうが！』

脳内ビッ……天使が戯言を言っているが無視する。

『アンタまたビッチって言おうとしたわね！！』

『うるさいビッチ』

『アンタはぁ！！』

と、ビッチに気を取られてまたガキをシカトしてしまった。

ようやく反射を切る。

「如月さん！聞いてますか！？聞いてますよね！？無視しないでくださいっ！！」

「うるっせぇぇぇぇ！！！んだてめえは！こちとらねみいんだよ！分かるか？お前に分かるのかこの辛さが！人間の三大欲求の一つである睡眠行為を妨害されたという事が俺にとっていや人類にとってどれだけ辛い事かわかるのか見たところ貴様はせいぜい１０年程度しか生きていないだろうがそれでもその３分の１は睡眠なんだぞ寝ているんだぞそれだけ人類にとって睡眠とは大切な行為であり尊いものなのだそれを妨害するという事は人が生きていくという当然の権利を貴様は剥奪したといっても過言ではないのだ貴様は何の権限があってそんな行為をする貴様は何様のつもりだ人が生きることを妨害しただただ自らの主張を声高に発言することだけを考え生きているのが貴様の生き方だというのかなんという傲慢な生き物なのだ貴様は人は一人では生きていけないというのに人は支えあって生きていかなければいけないというのに人は愛によってはぐくまれているというのに貴様からはそれが感じられんまだたった１０年しか生きていないとでもいうかもしれんが１０年だぞ貴様はもう１０年も生きているのだそろそろ相手を敬い大切に思い共に生きるという事を知ってもいいのではないのかそれがまだできないというのなら貴様はただの獣だいやむしろ蛆虫だミトコンドリアだ分かったかいや分からないだろうな貴様の様な他者を踏みつけ傲慢に生きている様な存在には分からないだろう全く嘆かわしい事このうえない存在だなどうしたらいいどうしたら貴様のような虫に睡眠の尊さを教えることができるのだろうか俺には想像もできない自分の無知がこれほど悔しく思う事は初めてだいや成るほど貴様はそうやって相手の無知を暴く事で自らの存在証明をしているというわけかなんとも嫌らしい存在だな貴様は全くふざけたやつだどうしたらいいどうしたら俺は睡眠をとらせてもらえるのだろうか教えてくれないか教えてくれないか虫よ認めよう自分が無知だという事を俺のような矮小な存

在では真理を伝えることは出来ないということをだがなそれでも俺は人間なんだ人間なんだよ睡眠は人に許された唯一といってもいい至福の時間なんだよ許せよ俺のような矮小な存在が睡眠を取る事を許せよ許せっつってんだよクソヤロウ！！てめえの血は何色だーっ！！」

「あああ、あかですっ！ごめんなさいぃぃぃ！」

はっ、突然の大音量に思わず我を失ってしまった……

『……さすがに引くわ、キャラ崩壊しすぎじゃない？』

『……うるせぇよ、ほとばしる熱いパトスが暴走しただけじゃねえか』

とはいえちょっとやりすぎた感は否めないな。

『ちょっと？』

『あぁちょっとだな』

「え、あ、あの、ごめんなさい。お休みの邪魔しちゃって……」

『……可哀想に』

『……』

なぜだが少々胸が痛いな

「あー、なんだ、気にするな」

「え、は、はぁ」

『なんでアンタは謝るってことをしないのよ……』

脳内ビッチがなにやら言っているが気にしないことにする

「寝ぼけてただけだ」

「そ、そうですか……」

「あぁ、それで学校は終わったのか？」

何やら納得のいってない顔をするが無視して話を先に進める。

「いえ、学校はこれから行くんですけど」

「ん、じゃあやはりまだ朝か」

「はい。えっとごめんなさい。寝てる所を……」

先ほどの事を思い出したのか、若干震えながらぼそぼそと謝ってくる。

『これってトラウマものよねー』

『……』

「はぁ、で？こんな朝早くから何の用だよ？話は学校終わってから

じゃなかったか？」

「あ、はい。えっと……なんといいいますか……ちょっと気になったといいますか……えっと」

なにやらごにょごにょと歯切れの悪い言葉が続く。

「あぁん？はっきり言えよ」

「え、えっとですね……如月さん！ご、ご飯……ご飯食べましたか！？」

おぉう、昨日も思ったがこのガキは急に威勢よくなるな。

「い、いや、まだだが。それがどうかしたか？」

「あああの、これどうぞ！！」

そういってカバンから取り出されたのはサンドイッチだった。

「あぁん？食っていいのか？」

「は、はいっ！家が無いって聞いて、その、心配だったので……よ、余計なお世話でしたか！？ご、ごめんなさい」

「いや、なんにも言ってねえんだが……食べてねえのは事実だからな。まぁ、もらっとくわ」

そういい、サンドイッチを受け取る。

何か手が震えてるんだが……まだ脅えてるのか？

『（……あれ？いつのまにフラグが立ったのかしら……）』

「あの私が作ったので……味はあんまり保証できないですけど……」

なんかぼそぼそいってるが気にせず食べる。

「うむ、食えるな」

「ほ、ホントですか？」

急に笑顔になりやがった……なんかイラっとするな。

『いやいや……自分に向けられた笑顔見てイラッとするってどんな精神状態よ』

脳内ウジ虫の突っ込みは気にしないことにして、黙々と食べる。

なにやらガキがにこにことこっちを見ているのが気になるが……あえて無視する。

「あ、もう行かなくちゃ」

どうやら学校に行く時間のようだ。

「じゃあまた放課後に来ますね、如月さん」

「……あぁ」

そう言い残し、俺はまたベンチに横になり背中を向ける、ガキが立ち去ろうとするのを気配で感じながら、

「……うまかった」

「え？」

……寝るか。

「……どういたしまして……千早さん」

眠る寸前なにやら小さな声が聞こえた気がするが……気のせいだろう。

そして俺は深い眠りに落ちていった。

4話　暴言者と公園で（後書き）

作者「デレたな」

天使「デレたね」

なのは「デレましたっ♪」

如月「俺をツンデレとか言いだしやがったらぶっ殺す！！」

5話　獣とビッチと暴言者（前書き）

今回は暴言少なめ？かも

5話　獣とビッチと暴言者

「よく寝たな」

辺りはすっかり夕暮れに染まっていた。

『いや……寝すぎじゃない？』

『寝る子は育つんだよ』

『アンタは不老不死だから……』

『あのなのはとかいうのはまだ来てないのか？』

『ナチュラルに無視したわね……今は戦ってるわ』

『なに？』

『昨日見たでしょ、あの化け物。似たようなのと近くで戦ってるわ』

『おい！早くいえよ！』

『大丈夫よ』

『なんだと！？』

『大丈夫よ、あの娘は強いから』

『……昨日も思ったがな、お前は何を知ってる？』

『全てよ』

『ああ……なんだ妄想か』

『アンタは私をなんだと思ってるのよ』

『ビッチみたいな蛆虫』

『殺す』

脳に激痛が走る……がそれも一瞬だけ、すぐさま雲体風身で痛覚を遮断する。

『馬鹿が、いつまでもそんなのが通じると思ってんじゃねえよ』

『アンタ……ホントいい性格してるわよね』

『いいからさっさと答えろ寄生虫』

『はぁ……もういいわ。あのね、私はこれから何が起きるのか知ってるのよ』

『そんな妄想は』

『いいから最後まで聞きなさい。但し知ってるのは次元の修正力が関わらない状態のものなのよ』

『つまり？』

『アンタが来た事でどうなるかは分からないって事ね』

『この役立たずのアメーバが』

『……まぁ、次元の修正力といっても話の大筋を変える事はできないはずだから、おそらく介入してくるのは戦闘時よ』

『どう介入してくるんだ？ミトコンドリアよ』

『……アンタに対抗する敵になんらかの力を与えるってのが一番ある展開なんだけど……どんな風かは想像もできないわ』

『なのはは戦っていると言ったな。その敵がお前の知る敵より強くなっているというのは考えられないのか？えーと、アオミドロ』

『……あ！』

『あ、じゃねえよ。このクソビッチが！！』

『あれ？呼び方戻った』

『うるせぇよ！！細けえ事気にしてんじゃねえよ』

『ところで、アオミドロってなによ？』

『ググれカス』

「あ、如月さーん」

脳内で不毛な口争いをしていたら問題のやつがやってきた。

「なッチか」

「え？」

『はっ！しまった、貴様のせいでなのはとビッチが混ざってしまったじゃないか。どうしてくれる！』

『いやいやいや、アンタ馬鹿でしょ！どうやったら混ざるのよそれ』

「なっち……なっち……私のあだ名ですか？そんな呼ばれ方したのは初めてです」

「それはそうだろう」

『こんな子供に名前＋ビッチのあだ名がつけられていたらそれはイジメ以外の何者でもないしな』

『この娘はそのあだ名の意味をそんな風に思ってないと思うよ……』

「でもありがとうございます！」

「は！？」

「わざわざ考えてくれたんですよね！嬉しいですっ♪」

『何……だと……？まだ子供の癖に自らビッチだという事を認め、尚且つそれを、う、嬉しいなどと……なんて小学生だ』

『いやだからそれ、盛大な勘違いだから』

「あー、そのだな」

「はい？」

「さっき化け物と戦っていたのか？」

とりあえずさっきのは無かった事にするため、話を逸らす。
さすがに小学生にビッチというのは無いからな。

「あ、はい。そうなんですよ。でもユーノ君のお陰で封印できました」

「ユーノ君？」

「昨日もお会いしましたね、ユーノ・スクライアです」

「おぉう、獣が喋った」

『獣て……』

とりあえず獣……もといフェレットから魔法そしてジュエルシードの説明を受ける。

「成る程な、つまり失敗して厄介ごとを別の世界から持ち込んだあげく、それでも身の程をわきまえない獣は先走って無様にも返り討ちに遭い、そしてなんともまあ情けなくも小学生、それも女の子に助けを求めたと、そういう訳か」

「……はい、そうです」

「あ、あの如月さん……も、もうちょっと優しく」

「それでジュエルシードとやらを集める事になったと、という事か」

なのはの抗議は無視して続ける。

『ふむ、この辺りは貴様の妄想と同じなのか？』

『だから妄想じゃないって……言っても無駄なのよね……はぁ、合ってるわよ』

『この後はどうなるんだ？』

『知らない方がいいわよ、変に知って半端に介入すると余計ややこしくなりそうだし、アンタは知らないままこの娘と行動しなさい。大事な事だけは伝えてあげるから』

『理由は分かったが、その偉そうな口ぶりはなんだ？イライラするな、ちゃんと敬語使えよ』

『逆でしょ！？アンタが私に敬語使いなさいよ！』

「事情はわかった、俺も協力しよう」

「「え？」」

「昨日も少し見せたが、俺もいくつか不思議な力を持っていてな。力になれるだろう」

「そういえば……昨日のあれは？ぶつかってきた相手の方逆にはじかれてましたが？」

「いま獣が言ったそのままだ。細かく説明すると面倒だから簡単に言うとだな、触れたものを限界無く全て反射する力。そう思ってもらっていい」

「え？そ、それってひょっとして魔法も反射しちゃうんですか？」

「ああ」

「無敵ですね……」

「俺もそう思う」

一応対応策もあるのだが、まあ言う必要は無いだろう。

「まあという訳で、自分の身は自分で守れる。俺が協力することに異論はないな？」

「力はわかりました……けれどどうして如月さんは僕達に協力してくれるんですか？」

理由ねぇ……次元の修正力とか言っても面倒だし、簡単に言うと

（俺が来た事がきっかけで次元が滅びるらしい。だからまぁ、この次元を）

「守るためだな」

「「え？」」

「そうだ、色々説明すると面倒だから簡単に言ったがな。まあそういうわけで“守るため”に協力してやろう」

『いや、全然説明になってないし……』

「あ、はい！よろしくお願いします。如月さんっ♪」

む、何故かなのはの顔が赤くなっているが

『勘違いしてるわねー』

『どういう事だ？』

『自分で考えなさい』

『ああ、そうしよう。お前と違って俺には脳みそがあるからな』

『え、何！？そのまるでお前には脳みそがないから考える事ができないんだろう的な返しは！？』

『あ、いや、す、すまない。お前に脳みそが無い事を気づかせてしまった……なんたる失態だ』

『いやいやいやいや、初めて謝ったと思ったら何よそれ！？何よその返しは！逆に傷つくわよ！！』

『俺としたことが……時に真実を伝える事がなによりの暴言だとい

う事を忘れるとは……』

『いや！だから反省するポイントが違う！！普段の態度を反省しなさいよ！！』

そしてまた延々と口喧嘩は続いていった。

5話　獣とビッチと暴言者（後書き）

話があんまり進んだ気がしない……とりあえず今回で原作2話終了
比較的原作どうりにやっていこうかなぁと思ってます

という事で次回は原作3話……に行く前に住む場所探しの話とかを
入れようか考え中。

それにしても「天使の使命」に比べるとすごく書きやすい……執筆
速度が倍くらい違うのは何故だ。

6話　お約束ってやつだ（前書き）

今回はちょっと今までと雰囲気が違います。

6話　お約束ってやつだ

「なのはさぁ、なんか最近機嫌いいよね？」
「うんうん、なんだか楽しそう。何かいい事あったの？」

学校で友達のアリサちゃんとすずかちゃんとお弁当食べてたら急にそんな事を2人が言い出した。
そう言われて、思い浮かんだのは魔法少女になった事……それと……如月さんのちょっと怒ったような顔

……あ、あれ？如月さん？

ちょっと不思議に思ったけど、一度思ったらどんどん頭の中で如月さんとの事が再生されていく。

魔法少女になった時、突然現れて助けてくれた人。
最初は乱暴な感じで怖かったけど、家に送ってくれたり、お礼のつもりで作ったサンドイッチをうまかったって言ってくれたり、愛称つけてくれたり……わたしの事、その、

……ま、まもるって言ってくれた人。

（……／／／）

「ん、なのは。顔赤いよ」
「ほんとだ、なのはちゃん。大丈夫？」

頭の中の如月さんを消すために、ぶんぶんと頭をふる。

「だ、大丈夫！なんでもないよ！！」

とっさにそう言ってしまう。

別に如月さんとはなんでもないから二人に紹介してもよかったけど……なんだか躊躇ってしまった。

「そ、それより、明日はサッカーの試合の応援だよね」

「あ、なんか誤魔化した」

「ご、誤魔化してなんかないよ。ほ、ほら集合時間とか決めないといけないなぁって。あ、あはは」

「むー！」

「まぁまぁアリサちゃん、なのはちゃんもいつか話してくれるよ。ね？」

「あ、あはは。なんにもないってばー」

如月さんと会って私、楽しそう……なのかな？自分じゃあよく分からない……けど、如月さんの事を考えたら……なんだか……

「……会いたいな」

「ん？」

「何か言った？なのはちゃん？」

「え、ううん。なんにも言ってないよ」

なんだかこの気持ちを話すのが恥ずかしくて、また誤魔化してしまった。

◆

そして今日は約束したお父さんのやってるサッカーチームの応援。
近頃はずっとジュエルーシード集めで疲れたから今日はお休みなの。

「でも、このフェレット。普通のとはちょっと違うわよね」

サッカーの試合が終わってみんなでお食事。
そんな中、二人にユーノ君が遊ばれてた……ごめんね、ユーノ君。

「あ」

ぼんやりと周りを見ていたら、ジュエルシード？みたいな青い石を
持ってる男の子が見えた……けど

「……気のせいだよね」

ちらっとした見えなかったし、うん。気のせい、気のせい。

「じゃあね」
「ばいばーい」

二人は用事があるのでここでお別れ。
そして私は

「おやすみー」

最近ジュエルシード集めで寝不足なので晩御飯までお休みします。
……着替えしてる時なんだか視線を感じたけど……気のせいだよね？

◆

「あん？」

この気配は、はぁ……ジュエルシードか。

『おい』

『気づいた？』

『ちっ！おちおち寝てもいらんねぇのかよ』

『いや……もう夕方よ……あんた一日何時間寝れば満足するのよ……』

『で、今度はどこに……確認するまでもねえな……随分でかい木だな』

『いっとくけど今回のはちょっと今までとは違うわよ。人が発動させたものだからパワーが大きいわ』

『はっ！ちったぁ楽しめそうじゃねぇか。アレを潰せばいいんだろ』

『ちょっと待った、まずはあのビルの屋上に行きなさい』

『あぁん？なんだお前目が見えないのか？さっさと眼科行けよ。そして死んでこいよ』

『だぁぁぁっ！！最後まで聞きなさい！！』

『１０文字以下で言え』

『なのはちゃんがいるわ』

『そうしたら無視してやる。って言ってる傍から１０文字以下で答えやがって……全くお前は人の話を最後まで聞けよ。子供の時習わなかったのか？それとも無視してほしいのか？とんだＭビッチだな』

『アンタはぁぁぁぁぁぁ！！』

適当にからかいつつ、ビルの屋上を目指す。
それにしてもからかうのも飽きてきたな……なんかアレだ、刺激が足りない気がする。
『……なんだか寒気がするわ』
屋上に着くとすでにそこにはなのはと獣がいた。
「お」
声をかけようとするが、シリアスぶってるアホな子の声が邪魔をする。
『待って、少し様子を見ましょう』
『あぁん？なんでだよ？』
『これは本来ならなのはちゃん1人で解決できる問題なのよ』
『だから？』
『この前は分からなかったけど、次元の修正力がどれくらい干渉してきているのか知りたいのよ』
『それでなのはが一人で解決できればそれほどでもない。逆にできなければ対処を考える必要があるって事か……』
『そういう事よ』
『なんだ、その関係無い事なんだが……』
『何？気に事があるなら言いなさいよ。ひょっとしたらそれが大事な事になるかもしれないでしょ』
『そうだな、じゃあ遠慮なく。いやお前みたいな馬鹿が考えてる振りをしているのを見ると滑稽だなって思ってな、いやすまない。関係無い事だったな』
『……ホントにね』

「やっぱりあの時の子が持ってたんだ」
「……私気づいてたはずなのに」
「……こんな事になる前に止められたかもしれないのに」
なにやらぐたぐた言ってやがる。

「ちっ！」
『まだ待ちなさいよ』
『わぁってるよ』

なんであいつはあんな泣きそう顔してやがるんだよ……ったく、気にいらねぇな。

「できるよ、大丈夫！」
「行って、捕まえて！！」
「リリカル、マジカル、ジュエルシードシリアル１０」
「封印！！」

そして今まで見たことの無い巨大な魔法の閃光が大樹の元へ飛んでいった。

『すげぇな……魔法少女。あいつ一人で問題ねぇんじゃ』
『いえ……失敗よ』

大樹に変化は無かった……いや赤くなっている？

『やっぱり……次元の修正力が干渉してる』
『どうなってんだ？』
『聞きなさい、タイムリミットは3分よ。それが過ぎると……この

惑星は滅びるわ』
『お前の妄想は』
『早くしなさい！アンタは守るんでしょ！！3分すぎるとあの木の根が惑星の中心部に辿り着いて爆発するのよ』
『っ！』

「なのは！」

「き……さらぎ……さん」
「……わたし気づいてたんです、あの子が持ってたの。でも気のせいだって思っちゃって……私がもっとちゃんとしてたら！」
「如月さん……わたしのせいで……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい」

「がたがたうるせぇよ！ぶっ飛ばすぞ馬鹿野郎」

この馬鹿はまだぐだぐた言ってやがんのか！

「失敗したのは分かった！お前のせいなのは分かった！ああそうだ！全部お前が悪い！気づいていたのにそれを放置したお前の責任だ！この惨状は全てお前のせいだ！！」

その言葉になのはの身体がびくっと震えるのが分かる。俯いたその顔は見えないが、もしかしたら泣いているのかもしれない。

『そんな言い方！』
「如月さんっ！なのはは！！」

天使と獣がなにやら言っているが今はそれどころではない
俺は頭にきていた。こいつが失敗した事じゃない。失敗してすぐに

泣き言を言いやがったことだ。

「それでお前はどうするんだ！その責任から逃げるのか！！一度封印を失敗したぐらいでお前は諦めるのか！！」

「……き……さら……ぎ……さん」

「答えろ高町なのは！お前はその程度の人間なのか！？いいかよく聞け！俺達は人間だ、人間なんだよ！！ちょっと魔法が使えるぐらいで驕ってんじゃねえよ！失敗なんかして当たり前だ！失敗しない人間なんかいない！だからこそ、だからこそ大切なのは失敗したその時どうするかなんだよ！！その時どう動くかでお前という人間の価値が決まるんだ！！」

「……わ、わたしは」

「答えろ！高町なのは！お前はどうするんだ！この状況でお前はただ俺に縋るのか！？縋ってそれで終わりなのか！！」

大樹は今も尚活性化している。
天使によればこのまま放っておけば地球は壊れるのだという。こんな無駄話をしている時間は無い。
それでも俺は言わずにおけなかった。こんな馬鹿を放っておく事が出来るわけが無い。

「……きさらぎさん、私に……」
「なんだ？はっきり言えよ！ぶっ飛ばすぞ馬鹿野郎！！」
「私に！私に力を貸してください！！」

ふんっ。ようやく目に力が戻りやがったか

「私だけじゃ封印は出来ませんでした……だから私に力を貸してください！迷惑なのは分かってます。私の力が足りないせいなのも……でも私が」

上手く言葉にできないようだが、その想いは伝わってきた。
だから俺はなのはの頭に――拳骨を落としていた。

「～っ！！」
「ごちゃごちゃうるせぇんだよ。言っただろうが協力するってな。お前は一言、手伝えって言えばいいんだよ」
「あ……は、はい如月さん！封印を――私を手伝って下さい！」
「ああ……それでいい。さっさとやるぞ。足引っ張りやがったらぶっ飛ばすからな」
「はいっ！」

『……いやー、珍しいもん見たわ……』
『……うるせぇよ、んでどうすりゃいいんだよ？』
『封印するのは、あのコアの障壁を打ち破る必要があるわ。逆にそれさえ出来ればなのはちゃんの封印でいけるわ』
『わかった』
『けど、あの障壁は並の魔力じゃ打ち破れない……残り時間は1分よ』
『問題ねえよ』

そう問題などあるわけがない。
イメージするはたった一振りの剣

「俺があの障壁を打ち破ってやる」
「……如月さん」

どんな魔力障壁を持っているが知らんがこの光り輝く剣を防げるわけがない。

「おまえは」
「なのはです」

はっ、ようやく調子が戻ってきたな。

「なのはは今度こそ封印を成功させろ」
「はいっ！任せてください如月さん」

俺が障壁を破る事に何の疑問も持ってやがらねぇな。
能力は反射しか見せてねぇんだが？

「まぁいいか、行くぜ」

――1分しかない？はっ！残り時間なんてな……

「1秒あれば十分なんだよ！！」

そして、両手に握った剣を全力で……この身体にイメージした魔力を込めて全力で振るう！

――お約束のパターンってやつを見せてやるよ！

「おらぁぁぁっ！！ぶっ飛ばしてやんぜ！！クソヤローーー！！！！」

剣から放たれた魔力の光が全てを飲み込んでいく。

“約束された勝利の剣≪エクスカリバー≫”

『はっ！次元の修正力だが知らんが舐めてんじゃねえよっ！！』

結果は……確認するまでも無い。

「ジュエルシード、封印！」

ここまできて失敗なんかする訳が無い――だろ？

6話　お約束ってやつだ（後書き）

というわけでいつもと違って暑苦しい如月君でした。

こんなんもいいかなぁ？って思って書いたのですが、如何でしたでしょうか？

次回はいよいよフェイト登場？です。お楽しみにっ！

7話　猫と金髪の物語

「とりあえず終わったな」
「はい……如月さん、本当にありがとうございました」
「……ああ」

『何よ「ああ」って、もうちょっとこう気の利いたセリフは無いわけ？』
『あぁん？うるせぇよ、どうでもいいだろうがそんなもん』
『そういう所で男の器ってのが決まるのよ』
『さすがビッチだけあって男をよく知ってるセリフだな』
『……もういいわ、それよりなんか疲れてる？』
『そりゃあ……な。さすがに疲れたわ』

「あの、如月さん……さっきのは魔法じゃないですよね？今のは一体？」

獣がなにやら言ってるが……面倒だな

「さっきのは魔法じゃない……あーまあ、なんかこうすっごい能力だ」

『適当ねー』
『……疲れてんだよ』

「それは……言えないレアスキルって事ですか？」
「別に言えない訳じゃない……疲れてんだ。帰って寝かせてくれ」
「あ、すみません」
「……帰るって……また公園ですか？」

「……ああ」
『いい加減どうにかしたら？』
『……そうだな』
「あ、あの如月さん！」
「あぁん？」
「家に来ませんか？」

◆

『……なんでこんな事に』
『よかったじゃない、住む場所ができて』
『……本当にそう思うか？』
『ぷっ……アンタの間抜けな顔見れたから私は満足よ』
『コロス』
「あの、すみません、如月さん……さすがに家族にはいえなくて……その」
そう今現在、俺はなのはの部屋に来ていた。
「それで、こっそりここで寝泊りしろ……とそういう訳か」
「は、はい」
「できるかっ！」
「きゃっ」

思わず突っ込んでしまった……家族に無断で小学生女子の部屋に住むとか無理があるだろ……

「で、でも公園じゃあ風邪ひいちゃいますし……そ、それにここならご飯もすぐ持って来れますよ」

「ぐっ……」

そう、実は食事はなのはに持ってきてもらっていたのだ……金も無いしな。

『見事なひもね』

『……』

「あ、あの、如月さん」

くっ……そんな泣きそう顔でみるんじゃねえよ。

「はぁ、分かった……住む場所が見つかるまで厄介になる」

「はいっ！」

早急に見つけるか……

「じゃあ、俺は寝る」

さすがに今日は疲れた……まぁ公園のベンチよりはぐっすり眠れそうだな。

「え？あ、あの、床じゃなくてベッド！ベッド使って下さい！」

「は！？いやいやお前の寝る場所無くなるだろーが、それともなにか、いつもベッドがあるのにあえて床で寝ているのか？そんなに苦しみたいのか！？」

普段からマゾ気質でもだしてんのか？さすがなッチは一味違うな。

「い、いえ、いつもは勿論ベッドですけど……如月さんは疲れてるみたいですからベッド使ってください。私なら床で大丈夫です」

「お前の部屋だろーが、お前が使え」

『いいじゃん一緒に寝たら……プッ』

『調子にのるなよクソビッチ……』

「え、あの、じゃ、じゃあ、……一緒に寝ますか？」

「ブッ！」

『わお、積極的ね』

『クッ……こいつもビッチと呼ばれて喜ぶようなやつだったな……』

『アンタまだそれひきずってたの……？』

『コイツ……何を考えてやがる……小学生の分際で……』

『というより、逆に考えるとアンタがなに意識してんのよ？』

『……なに？』

『相手は小学生なのよ、アンタからしたら妹みたいなものじゃない』

『ふむ』

『小学生の妹と一緒に寝るぐらい普通よ、普通』

『な、成る程……そういうものか』

妹なんていなかったからな……よくわからんが……

『そうよ、逆に意識する方が可笑しいのよ、堂々と一緒に寝てあげたらいいのよ』

『そ、そうか……そうだな』

『（計画通り！）』

『今何か不吉な事考えなかったか？』
『気のせいよ』

「はぁ、おい」
「は、はい」
「寝るぞ」
「え？」

もう面倒になったので、さっさとベッドに入る。

「なんだ？寝るんじゃないのか？」
「い、いえ。あの、お邪魔します」
「元々お前のベッドだ。好きに使えよ」
「はいっ！えへへ」
「何にやついてんだよ。アホか」
「……傍にいっていいですか？」
「……好きにしろ。俺は寝る」
「はい、お休みなさい……如月さん」

◆

『で……なんでこんな事になってんだ？』
『いいじゃない、可愛いでしょ？い、も、う、と、みたいで』
『……』

朝目覚めたら、何故か俺は抱き枕代わりにされていた。

「むにゃ……如月さん」

『あ、寝言でアンタの事いってるわよ』

『知るか』

だから身体を……もういい……もう一眠りするか

やたら安らかな顔しやがって……

◆

『で……なんで俺はこんな不法侵入なんかせねばならねぇんだ？』

『……だから必要な事なのよ』

『だから、理由を言えよ。ぶっ飛ばすぞコノヤロウ』

『あとで分かるわよ』

『ちっ』

視線の先ではなのはが同じくらいの子供、おそらく友達だと思われる二人と仲よさそうにしていた。

なんでもここはなのはの友達の家らしい。

『それにしてもやたらでけぇ家だな』

『お金持ちだからね』

『どうせなんか悪どい事して儲けてんだろ、これだから金持ちってのはいけすかねぇ』

『……それ、ただの嫉妬でしょ』

『こういうやつらがいるから世の中から戦争がなくならないんだ』

『くだらない個人の嫉妬を世界規模まで広げないでよ……』

『来るわよ！』
『今度はなんだよ？』
巨大な猫がそこにいた。
『おぉう！』
『こんなにでかいと可愛くないわね……』
『んで、あれをどうにかすりゃいいわけか』
『そう……なんだけど、変ね？』
『あぁん？』
『次元の修正力の干渉を感じないわ』
『そりゃ楽でいいじゃねえか、アレだろ俺の強さにびびったんだろ』
『……それならいいんだけど』
『なら今回はあいつに任せるか』
なのはが来たようだし、俺は高みの見物といこうか。
ドン！ドン！ドン！
そう思っていたら、横から邪魔が入りやがった。
「にゃあああ」
おいおい、猫に対して問答無用で攻撃魔法かよ
『なんだありゃ？』
『もう一人の魔法少女よ』
見ると、金髪で黒い服装をした少女が木の上にいた。

『で？あの痴女みたいな服装したのは放置プレイでいいのか？』
『……えぇ』

気づけばなのはもやられそうなんだが……

『おい！』
『いいから、負ける事も強くなる為には必要よ？』
『ちっ！』
『アンタって意外と過保護よね？それとも本気になっちゃった』
『んだよ本気って……意味わかんねぇことばっか言ってんじゃねえよ』

「……ごめんね」

気がつくと決着がついていた。
つーか謝るぐらいなら攻撃なんかするんじゃねえよ。
巫山戯たガキだな。

『なんか黒いもん出てるよ……』
『あぁん！！？』
『ひっ！……怖いから、ちょっとマジで怖いから！』

脳内ビッチがうるさいな……

『意外とゆうか……いつの間にそこまでなのはちゃんが大事に』
『あぁん！！！！？』
『ご、ごめんなさいっ！』

金髪のクソガキがジュエルシードを封印しようとしている。

『……クソガキて』

しかし金髪魔法少女が猫に触れた瞬間、猫の姿が光り、その姿を消してしまった。

『あれ？』

『おいおい、ありゃまずいんじゃねぇか？』

すっげぇ、嫌な予感がするんだが……

「な、なに！？」

「マジかよ……」

さっきまでの金髪だった髪は不自然に白く染まり、その頭には猫耳を生やしてやがる……

「――にゃおん」

金髪魔法少女は……真っ白い障り猫になっていた……

7話　猫と金髪の物語（後書き）

というわけでまさかのフェイト障り猫化

天使「で、この後どうすんのよ？」
作者「なにが？」
天使「いや、障り猫っていってもあの馬鹿は反射あるから意味ないでしょ？」
作者「反射はあくまで、自分だけだからなー。今回の障り猫の狙いは主人公の周り、つまりなのはたち。そうなると反射じゃ守れないので使用無し」
天使「つっても、原作どおりにやればいいんじゃない？」
作者「え？噛むの？如月＝１８歳♂がフェイト＝９歳♀の首を噛むの？」
天使「……絵面的にちょっと……アレは刀は？」
作者「アレだと、フェイトが完全に融合していた場合フェイトごと切ってしまうので、使いません。」
天使「……どうすんのよ？」
作者「これから考え、っ痛！、ごめ、ちょtっと石を投げないで！」
天使「え？マジで考えてないの？」
作者「冗談です。ちゃんと考えてます。ちょっとご都合主義&知らない人が多そうだけど……」
天使「というか障り猫化って……そもそもアリなの？『猫物語』ってリリなのじゃないよ？」
作者「いや……むしろこれが書きたくてはじめたシリーズだし」
天使「は？」
作者「ぶっちゃけ暴言とかどうでもよかったんだ。てへっ♪」
天使「そのせいで私がどんだけ苦労してんのか分かってんのかーー！！」

作者「ちなみに書きたかった事はもう2つあります」
天使「ナチュラルに無視すんなやーー！」

そんなわけでまた次回！
次はちゃんとバトルする……予定です。

8話　障り猫と神殺し（前書き）

色々と元ネタ知らない人は置いてけぼりな展開になってきました…
…ちょっと反省している。

8話　障り猫と神殺し

「障り猫……っておい」

俺は思わず飛び出していた。

『なんなのあれは？』

『人にとりつく怪異ってやつだ』

「あにゃたはだれにゃ？」

『え？なになに？あれめっちゃ可愛いじゃない！お持ち帰りしたい！！はぁはぁ……』

『お前のキャラ崩壊がありえねよ……ロリコンで百合か……すくわれねぇな』

『うっさい、早く、早くあの娘を私の下にいぃぃぃ！！』

『ダマレ』

最近キャラ崩壊が多い気がするんだが……暑さのせいか？

「ふむ、どうやら今回にょご主人さまはちょっと複雑みたいにゃ」

「どう複雑だってんだよ？エロ猫？」

「簡単に言うとだにゃ、お前のせいにゃ」

「は？意味がわかんねーよ。日本語で喋れクソガキ」

「ふんっ、ほんとはわかってるにゃ？」

『……次元の修正力……にゃ』

『……マジかよ、お前が言っても心底気持ち悪いだけだな。寒気がしたぞ、新しい嫌がらせか？』

『うううっさい……アレ？ちょっと待って、お前がってじゃあ

アンタもあの娘可愛いって』
『ダマレ、言葉のあやだ』
『そんな事いって、可愛いんって思ったんでしょ？でしょ？』
『にやにやすんじゃねよ、クソビッチ』
『勢いがないなぁ、ププ』
『……なんかやけに調子にのってるな、貴様の立場を分からせてやろうか？』

「放置プレイは嫌いにゃ」
「っ！！」

気づいたら一瞬で数十メートルの距離を縮めてきやがった……こいつ！？

「俺のキャラ設定は知ってるにゃ？」
「クソッ！」

まずいまずいまずい、こいつの能力はエナジードレイン！触るだけで相手の生命力を奪い……最悪命を奪う。

焦る気持ちを抑え付け、とっさに反射を使用する。変化は無い……間に合った……のか？

「なんてにゃ」

しかし接触するその瞬間、触り猫は俺の目の前から消えていた。

「なに！？」

気づけば障り猫は……気絶しているなのはの傍で立っていた。

「油断大敵、にゃ」

『コノヤロウ！俺を舐めやがって！！殺す殺すぜってぇ殺す！！！』

障り猫はなのはの傍にいるだけで、なのはの身体には触れていない。しかしその目は言っている。近づけば……こいつを殺す、と。……ユーノはすでに障られて気絶していたが。

『どどどどーすんのよ！？

『うるせぇ、てめぇも考えろ』

手は――ある。

「さ～て、どうするにゃ？」

「舐めてんじゃねぇぞ」

単純にテレポーテーションで取り返せばいいんだよ。

「にゃ！？」

取り返したはいいが、問題はその後だ。

この馬鹿はまだ気絶してやがるし……それにまさかとは思うが、

『おい、天使』

『え、え、え、ええーーー！！！アンタが、アンタが、私を天使って呼ぶなんてコレなんて異常事態！？まずいますいわ、まさか次元の修正力がアンタの意識を乗っ取るなんて……というか簡単に乗っ取れるような魂なら先に私がしていたのよ！！それをやってのけるなんて！』

『……お前が俺の頭に住み着いてるのは乗っ取りが失敗したせいか……？』
『当たり前じゃない！！じゃなきゃ誰が好き好んでアンタなんかに！……はっ』
『……よくわかった』
『……な……な～んて……にゃ？』
『ダ・マ・レ』
『ほ、ほら、そんな冗談で心はすっかり落ち着いたでしょ！？い、今はこの状況をなんとかしないと！』
『後で覚えてろよ』
『なんのことか……にゃ』
『……にゃはやめろ。あの金髪、もとい白髪クソガキは殺していいのか？』
『ダメに決まってるじゃない！！アンタ何言ってんの！？あんな可愛い子を殺すなんて……はぁはぁ』
『……それはもういい』
『まぁ、冗談抜きでダメよ。あの娘もこれから必要な娘なんだから』
『……ちっ』

嫌な予感は当たったか……あのクソガキごと殺っていいなら楽勝だったんだが……つまり触り猫だけをなんとかしろって事か……面倒だな。

『なんか手は無いの？』
『無い事は無い……』

「おい、障り猫」
「にゃんにゃ？」
「お前は完全に融合しているのか？」
「それに答える義務はにゃいにゃ」

「ちっ！」

障り猫はそう答えると、こっち……いや俺の足元で気絶しているなのは目掛けて向かってきやがる。

『何々？どういう事？』

『怪異だけを切る刀はある。けどな、完全に融合していたら一緒に切っちまうんだよ』

『何よそれ！？』

テレポーテーションで逃げ回るが……反撃の手段が無いってのが辛いな……こいつの感じからして目的は俺の周りの人間なのだろう。ここで取り逃がすと更に厄介な事になりそうだしな。

『こんな短時間で融合できるとも思えない……賭けるか？』

『ダメよ。絶対ダメよ。そう思わせて切らせるのが目的かもしれないじゃない』

『……子供一人突然いなくなるなんて世界からすればありふれた事だと思わないか？』

『アンタは「俺が全部守ってやる」とか言ったの忘れたんかーーー！！』

『人は変わるんだよ。変わる生き物なんだ』

『都合のいい事ばっかり言ってんじゃないわよ』

『……ちっ』

とは言ったもののどうするかな……吸血鬼として噛む……か？

……子供を、噛む……のか？

……無いな

『一つ確認したい』

『なに？』

『俺の力、イメージってのは発動条件がある能力も使えるんだよな？』

『当然よ』

『発動条件を満たしていないとやっぱり使えないのか？』

『厳密には違うわ、大体そんな事いったらアンタなんて魔力自体は全く無いのよ？大切なのはイメージする力よ』

『確かにな……』

不思議には思っていた。例えば反射は本来高度な演算能力を必要とするがそんなものは勿論俺にはない。

『とは言っても、イメージできない事は絶対にできない。つまりアンタはイメージした事が有り得ると確信しなきゃいけないのよ。発動条件があるのにそれを全く無視して発動させようとしてもアンタの脳に刻まれた記憶が恐らく拒絶するわ。脳を騙す事が必要なのよ』

『成る程な……騙す……騙すね……』

それならいけるか？

……他に手も無いしな。

「障り猫、お前は招き猫の対極の概念、元々は言葉遊びから生まれた遊びみたいな怪異だ」

――怪異つってもようは神様みたいなもんだろ。

「福を招く招き猫に対しての障りを招く障り猫」

――イメージするはウルスラグナ神第十の化身≪戦士≫

「死んだ振りをして同情を誘い、寄ってきた人間に取り付く身体を乗っ取る怪異。――そして身体の持ち主を不幸へ落としていく怪異」

――イメージしろ、神の知識を詳らかにする事でその言霊を黄金の剣にする力、神に対して最強の剣となる力を

「現在ではただの二重人格として扱われる場合も多い、だが昔は民間伝承として人々に広まっていた怪異譚」

――光が剣を形取る……しかし、まだだ、まだ足りない。

「にゃにか危険な気がする、にゃ！！」

障り猫の速度が上がる、上がる、上がる。
最早視認できる速度ではない、なんだこれは！？

「不思議かにゃ？これはご主人様の力にゃ」

ちっ！そういや元が魔法少女だったな。

見てからテレポーテーションじゃあ間に合わない、確認もせずランダムに飛び回る。
1秒たりとも同じ場所にいられない。
それでも逃げ回るその間に剣を作り続ける。
それは本来ならありえない二つの異なる世界の力を同時に使用し続けるという事。
そしてそれは脳が拒絶する行為。頭にガンガンと痛みが響く。
割れるように痛い……イメージ……しきれない。

「どうしたにゃ？顔色悪いにゃ」
「……うるせぇよ……余計なお世話だ……馬鹿野郎……」

頭の中はいまだにガンガンと響いている。
思考がまとまらない。もう超能力を使うのは無理だ……
腹をくくり、逃げるのを止めて手元の剣だけに集中する。

『ちょっとしっかりしなさいよ！アンタが負けたらなのはちゃん、それにあの娘もただじゃすまないのよ！？』

……てめぇもごちゃごちゃうるせぇよ……あのクソガキの事なんか考えてられっか……

障り猫はすでに俺の左腕を両手で掴んでいた……頭痛は治まった変わりに……身体から力が抜けていく。

――クソガキ……障り猫に魅入られた……子供

目の前には白い髪をしたクソガキ……
なのはと同じくらいの……まだ小さな子供

「……障り猫はきっかけにすぎない。優しさを持って同情した者にも必ずその裏がある――人間の裏側を見透かす為の物……」

……身体から力が抜けていく……もう立っているのも難しい……頭が……回らない。

意識が遠のいていく……

最早ぼんやりとしか見えない視線の先には、にやにやと笑っている顔が見えた。満足に動く事もできない俺の姿をあざ笑うかのように……けれど……何故かその目は笑っていないように見えた……

――……次元の修正力はこのガキに……障り猫にとりつかせた……何故？

そして、疑問でもあり、最後の言霊である言葉を口にする。

「……猫被り……猫は、被るもの」

その言葉は剣を強化する言霊にもなり……また少女の動揺を誘う言葉でもあった。

「わ、わたしは……」

その動揺は一体何なのか

――クソガキ。お前は……何を被っている？

俺の言葉に障り猫が一歩身体から後ずさる……このガキは一体何故そんなにも苦しい顔をしているのか……

何か言葉を紡ごうとしている……けれど障り猫にとりつかれたまま

ではそれも満足に出来ない。
……それでも……何故か必死な顔で……何故か悲壮な目で……俺を見ていた。
「もういい」
――そんな目で俺を……いや、世界を見てるんじゃねえよ。
「今――してやる」
……動きを止めた障り猫の腹部に……俺は真っ直ぐ剣を突き刺した。

◆

「私は……」
「気がついたか？」
目を覚ますと、そこには知らない男の人がいた。
「貴方は？」
「覚えてないのか？」
うっすらと脳裏に浮かぶのは、猫……そして優しい顔をした人
「助けて……くれたんですか？」
「どうだかな。元々は俺のせいでもあるらしいしな」

「……ありがとうございます」
「だから俺のせいだっつってんだろ。話を聞かねぇクソガキだな」
乱暴な口調……だけどそこには優しさが入っていた
「お前はジュエルシードを集めているのか？」
「はい……それが母さんの望みだから」
「母さん……ね」
「貴方も集めているのですか……そこの少女のように」
「ああ、俺はこいつの協力者だ」
「……私を捕まえないのですか？」
「あぁん？なんでそうなるんだよ？アホか」
「え、え？わ、私はその……この子を、攻撃しましたし」
「ごちゃごちゃうるせぇな、疲れてんだよ、ぶっ飛ばすぞ馬鹿野郎」
「え？え？」
「こいつとお前は目的が同じだった。それで戦ってお前が勝ってジュエルシードを手に入れた。それだけの話だろうが」
え？え？この人は何を言ってるのだろう？
「ほれ」
そういって投げられたのは……青い石……ジュエルシード
「……いいんですか？」
「お前が勝ったからな、お前のもんだ」
ジュエルシードを握り締める……母さんが望んだ石……これが集まれば……きっと

「お前が何を抱えて、何を被っているのいるのかは知らねぇがな、とりあえず今はソレが必要なんだろ」
「……はい」
そう、これさえ集まればきっと優しかった母さんが戻ってくるから……
「ごめんなさい、もう行きます」
「ああ」
「……また、会えますか？」
「お前がその石を諦めないなら、また会う機会もあるだろ」
「……そうですね」
今度会うときは敵として……そう言われた気がして少し辛かった
「如月千早だ」
「え？」
「名前だよ、名前」
ちょっと照れた感じで横を向いたその動作が、さっきまでの乱暴な態度と全然違っていてなんだか可愛く見えた。
「フェイトです。フェイト・テスタロッサ」
「テスタロッサか、お前は一人なのか？」
「いいえ、います。アルフっていう……大切な友達が」
真っ先に浮かんだのはいつも一緒にいてくれる……大切な友達
「そうか」
「……はい」

本当はもう少し話していたかったけど……

「……では、次に会うときは敵として」

「知るか、ガキが生意気いってんじゃねえよ……敵かどうかは俺が決める。勝手に決めんなボケ！」

「は、はいっ」

……できたら、また会いたいです……敵としてじゃなくて……別の立場で。

8話　障り猫と神殺し（後書き）

はい、というわけで障り猫編終了！

天使「短っ！障り猫編っていうほどのエピソードじゃないでしょコレ！？」

作者「うっさい、書くのに時間かかったんだよ。気分的にはやっと終わったーって感じなんだよ」

天使「おそっ！そんなに難しい文章書いてないでしょ？」

作者「いや……戦士の力が面倒で……色々書き直したりしてた……本当はもっと障り猫の知識を集めたかったけど諦めた」

天使「っていうか、戦士の力って「カンピオーネ！」でしょ。分かる人どんくらいいるのよ？」

作者「さぁ？」

天使「……アニメ化もしてないラノベの能力なんて出して読者はどれだけついてこれるのかしら……」

作者「……」

天使「……」

……感想待ってます……

9話　しらない天井と手錠（前書き）

またもや途中一部文章がおかしいですが仕様です。

……次の章⇒◆マークまで読み飛ばしても全く支障はありません…

…

9話　しらない天井と手錠

「私は……」
「気がついたか？」

あれから数十分たってようやく目覚めやがった。
戦っている最中は見事な白髪だったが、今は元の金髪に戻っている。
正直成功するかどうか賭けだったんだがな、まぁ無事障り猫だけをなんとかできたようだ。

「貴方は？」
「覚えてないのか？」

まぁどっちでもいいがな。

『格好良く助けてフラグゲットの機会だったのにね』
『うるせぇよ』

興味ねえよ。お前と違ってロリコン属性ねぇんだよ。

「助けて……くれたんですか？」
「どうだかな。元々は俺のせいでもあるらしいしな」
「……ありがとうございます」
「だから俺のせいだっつってんだろ。話を聞かねぇクソガキだな」

『なんか暗いやつだな、面倒くせぇ』
『相変わらず優しさがないわね……』

「お前はジュエルシードを集めているのか？」

「はい……それが母さんの望みだから」
「母さん……ね」
「貴方も集めているのですか……そこの少女のように」
「ああ、俺はこいつの協力者だ」
「……私を捕まえないのですか？」
「あぁん？　なんでそうなるんだよ？　アホか」
「え、え？　わ、私はその……この子を、攻撃しましたし」
「ごちゃごちゃうるせぇな、疲れてんだよ、ぶっ飛ばすぞ馬鹿野郎」
「え？　え？」
「こいつとお前は目的が同じだった。それで戦ってお前が勝ってジュエルシードを手に入れた。それだけの話だろうが」
『あれ？　さっきまでは黒いもん出してたのにどういう心境の変化よ』
『一々うるせぇよ、気にすんじゃねぇよ』
こいつにも何か理由がありそうだしな。
「ほれ」
転がっていたジュエルシードを投げてやる
「……いいんですか？」
「お前が勝ったからな、お前のもんだ」
こいつの母親も何が目的でこんな危ないもん集めてんだか
「お前が何を抱えて、何を被っているのいるのかは知らねぇがな、とりあえず今はソレが必要なんだろ」
「……はい」

大事そうにしやがって……あんな苦しそうな顔してまで、母親の望みとやらが大事なのかね。

「ごめんなさい、もう行きます」
「ああ」
「……また、会えますか？」
「お前がその石を諦めないなら、また会う機会もあるだろ」
「……そうですね」

また会えるっつってんのに、何でそんな顔してんだよ……いらっとすんな。

「如月千早だ」
「え？」
「名前だよ、名前」

『おやおや、なのはちゃんの影響かな？』
『なんだそのうざいババアみたいな喋りは』

ちっ……ガラじゃねえ事ぐらい分かってんだよ。

「フェイトです。フェイト・テスタロッサ」
「テスタロッサか、お前は一人なのか？」
「いいえ、います。アルフっていう……大切な友達が」

俺はこいつが心配なのか？
……まぁどうでもいいか。

「そうか」

「……はい」

今日は疲れたしな、考えるのは止めだ。

「……では、次に会うときは敵として」

「知るか、ガキが生意気いってんじゃねえよ……敵かどうかは俺が決める。勝手に決めんなボケ！」

「は、はいっ」

ったく、また何か無理やり感情を押さえつけたような顔しやがって。何が敵としてだ、独りよがりにもほどがある。

あー駄目だ。なんかイライラしてきた。

こういう根暗そうなクソガキ見てるとマジでイライラする。

『……あれ、なんかいつもより優しいなとか思っちゃったけど、相変わらずで安心したわ』

脳内で寄生虫が何やら言ってるが……駄目だ、もう疲れて反論する元気もねぇ。障り猫に体力がっつり持ってかれたからな……ガキも行ったみてぇだし……このまま

『ちょっと！　待ちなさいよ！　こんな場所で寝たら……』

『……うるさいｚｚｚ』

『ま、まずいってー！』

◆

知らない天井だ……なんてベタなボケはいらん。
つーかなんだこの状況。

『だからまずいって言ったのに……』
『知るか！　俺はやりたいようにやる』
『じゃあ、やりたいようにこの状況をなんとかしなさいよ』

それが難問だ。
今現在、俺はやたらとでかいベッドに寝かされていた……後ろ手に両手を手錠で拘束されながら。

『んで、何でこんな不審者扱いみたいな状況になってんだ？』
『だってアンタ不法侵入したのよ？』
『……そういやそうだったな』
『アンタ実は馬鹿でしょ』
『ふっ、よかったな俺のミスを指摘できて。お前の様な脳みそが無い馬鹿には一生に一度あるかないかの幸運だぞ』
『だからアンタは何でそんな上から目線なのよ……』

勿論抜け出すだけなら問題ないのだが、厄介な事に周囲には俺と同じくらいの歳の男と女が1人ずついた。とりあえず起きた事に気づかれていないようなので寝たフリを続ける。

『こいつら、動けない俺に何をする気だ……まさか……アッーーーーーー！』
『アンタはナニを想像してるのよ……っていうか女の子もいるじゃない』
『ふっ、今の言葉だけでナニを想像したんだお前は？』
『なっ！　べっ、べつになにも想像してないわよっ！』
『ホントかぁ？そのわりに動揺しているみたいだがなぁ？』

『うるさいうるさいうるさい』

こいつ……意外と純情だな……キャラが掴めん。

『ていうか、作者が何も考えてないんじゃない？』

『メタ的な発言は止せ』

ふぅ、危うく危険な会話をするとこだったぜ。なんてボケてる場合じゃないんだよな。

とりあえず今はまだ寝たフリをしているが……どうするかな。

『アンタの暴言も段々弱くなってる気がするしね』

『何故またメタ発言をぶり返す！？』

折角俺が話を切り替えてやったというのに！？

これだから人の気遣いが分からん馬鹿は困る。

『もうタイトル変えた方がいいんじゃないかしら？』

『止めろ、作者も気にしてるんだ』

というか前回までのシリアスな空気返せよ。

『作者がシリアスに疲れたんだってさ、元々息抜きで書き始めた話だしね』

『……こんな会話後書きでやれよ、作者は馬鹿か』

さすがにこれ以上は危険すぎるな。

ふぅ、気を取り直して……

さて、いつまで待ってもこの状況は変わらんし、いい加減に寝たフ

リを止めて行動するか。
いざとなったら逃げればいいしな。

『ところで……』
『なんだ？』

ちっ、動きだそうとした所で邪魔しやがる。
これだから空気読めないやつは。

『結局リニスは出すのかしら？』
『知らねぇよ！　知るかよボケ！　そもそも誰だよリニスって！』
『あれ？　知らないの？　ほらアレよ猫の』
『知るかボケッーーー！！』

いやいやいや、いくらなんでもフリーダムすぎるだろ！
ただでさえ、前回の読者置いてけぼりな能力使ったせいでヒヤヒヤしてるってのに、読者が完全に離れるぞ！？

『折角頂いた感想に対して曖昧というか……はっきりしなさいって感じよね！』
『感じよね！　じゃねぇよ！　じゃねぇよ！』

何だこいつ！？　キャラ変わりすぎだろ！？

『大体さぁ……作者もちゃんとキャラ設定ぐらいしっかり書きなさいよ』

いかん、愚痴モードが始まった。

◆

ふぅ、必殺の章変えリセットを使用してしまった。
というわけでＴａｋｅ２

知らない天井だ……

クッ！　俺とした事があんな所で気を失ってしまうとは……
とりあえず脳内ビッチと今後の事を話すか。

『おい！』

『～～～ていうか作者もメタ発言だけでリミット４万文字目指すとか考える時点で馬鹿でしょ』

『あれ！？　変わってなくない！？』

◆

目が覚めると、そこはしらない天井だった。
どうやらベッドに寝かされているようだ、手錠で両手を拘束された状態で……

こちらが目覚めたのに気づいたのか、横に突っ立っていた男が話し

かけてくる。
「お前は誰だ？」
『え？　あ、あれ？　今までのは……』
……目が覚めると、そこはしらない天井だったんだよ！！
「人に聞く前に自分が名乗れよ。子供の時習わなかったか？」
「……高町恭也だ」
「月村忍です」
おぉう！　不法侵入者に律儀に返すとは……こいつら馬鹿だな。
「そうか」
「……お前の名前は？」
「……わからん」
「なに？」
「記憶喪失ってやつでな、何も思い出せないんだ」
「……そうか、すまない」
……信じたよ
「嘘くさーい」
「ちょ、ちょっと、アリサちゃん」
「貴方達、なのはちゃんの所にいなさいって」
「ノエルが傍にいるから大丈夫よ」
さっきまでなのはと遊んでいた子供が部屋に入ってくるや否や、突

っかかってきやがった。

「大体なんですずかの家の敷地内にいたのよ」

「さぁ？」

「さぁって！？　なによその態度」

「記憶喪失なんだから仕方がないだろう？」

「だからそれが嘘くさいって言うのよ！」

「アリサちゃん止めなよ」

こういう生意気そうなガキにはお灸を据えないとな。

「おいおい、何の根拠があって嘘だなんて言うんだよ」

「だって都合良すぎじゃない！　大方不法侵入して見つかったから逃げる言い訳でしょ」

『鋭いね～』

『まぁ確かに都合良すぎだろうな』

「あぁん？　お前は酷いやつだな、記憶喪失の人間を疑うなんて……傷つくぞ」

「何よ、その態度からはどう見ても傷ついてるように見えないわよ」

「おいおい、そんだけ啖呵切ったんだ。もし本当に俺が記憶喪失だったらどうなるか分かってんのか？」

「な、何よ？　どうなるっていうのよ！」

「お前は記憶が失って自分が何者かも分からず不安な人間に対して、不法侵入者とまで言ったんだぞ、それがどれだけ相手を傷つけるの理解してるのかって事だよ」

「う、だ、だって記憶喪失なんて嘘じゃん」

「アリサちゃん、止めなって！」

「なんでよ！　もしかしたらこいつのせいでなのはが気絶したのか

もしれないのよ！」

あぁ、やけに怒ってると思ったらそのせいか……とんだ濡れ衣だな。

『まぁ、状況証拠的には逮捕間違い無し！　だもんね～』

『……それは認めてやる』

「どんな理由があるか知らんが、証拠も無く人を犯罪者扱いするなんてどういう教育を受けてんだ」

「うぅ……」

「アリサちゃん、謝ったほうがいいよ……」

「いや！　絶対いや！」

やれやれ、傍にいる大人2人もどうしたもんかとすっかり困ってるじゃねぇか、これだからガキは嫌いなんだよ。

「はあ、話は平行線だな、俺は行かせてもらう」

「どこに行くんだ？」

「……病院だ」

「医者ならこちらでお呼びしますよ」

ちっ！　大人2人が余計な気遣いしやがって、空気読めよ。つーかマジで疑ってねえの？　頭可笑しいだろ。

『アンタとは人としての在り方が違うのよ』

『ただの馬鹿だろ』

とはいったもののどうやって逃げるかな……あんま能力を使用して目立つ真似は避けたいんだが……

「あれ？　如月さん」

そう思案していると、俺の名演技を全て台無しにする小童が来やがった。

「どうしたんですか？　怪我……したんですか？」
「なのは！　この不法侵入者知ってるの！？」

不法侵入者言うな。

「うん、如月千早さん」
「ああ、如月千早だ」
「アンタ！　記憶喪失じゃ？」
「嘘だが？　それがどうかしたか？」
「やっぱり嘘じゃない！」
「騙されるほうが悪い」

『開き直るの早いわねー』
『面倒になったからな』

横でなにやらギャーギャー言ってるが無視だ無視。

「……ひょっとして私の事心配してくれたんですか？」

『盛大な勘違いだな』
『……そうでもないでしょ』

「どういう事だ、なのは？」
「あ、え、え～と、今朝ね、如月さんに会って、その、私が体調不良なの見られちゃって、それで、その～」

「まぁそんな感じだ。なのはが体調不良で倒れた時咄嗟に身体を押さえようとしたら頭がぶつかってしまって俺も気絶したんだそういうわけだから俺は帰る」

そんな無理やりな説明となのはのフォローにより事なきを得た。

……しかし今度はなのはとはどこで知り合ったとか、面倒くさい質問が飛んできやがったので適当に誤魔化してやった。

『はぁ……なんか疲れたな……』

『だからあんな場所で倒れるなって言ったのに』

寝かせてくれ……って今日もあいつのベッドで寝るのか……

『すっかり慣れちゃったわね、ププ』

『……うるさい』

9話　しらない天井と手錠（後書き）

天使「なんか最近暴走しすぎじゃない？」
作者「主にお前がな！」
天使「人のせいにすんな！」
作者「えぇ！？」
天使「まぁいいわ。で、次は温泉？」
作者「決してよくないんだが……一応その予定だ」
天使「今度はアルフも来るのね」
作者「……でもなぁ、アルフの扱いどうしようか、ユーノみたいにほとんど存在しない空気キャラにしようか？　ってかこの先どうしようか？　フェイトの話やったから温泉は飛ばしちゃおうか？」
天使「……本当にノープランよね……」
作者「色々悩み中なんだよ……」

10話　温泉……？

『で……なんで俺はまたこんな犯罪者みたいな真似をせねばならんのだ？』
『だから必要な事なのよ、いいじゃない、無垢な少女が何も身に付けずに戯れている姿は人類の共通財産よ』
『うるせぇよ、ぶっ飛ばすぞコノヤロウ』
『みんな肌白いわねー。ね？　いい眺めでしょう？』
『ダマレ、こんなん見てもなんとも思わん、で、今度はここで襲われるのか？』
『え？　なに言ってんの？　違うわよ』
『はぁ？』
『ただ私が見たいだけよ』

……帰るか。

は？　何を見てたかって？　そんなもんてめぇでイメージしてろ。

◆

『ブーブー！』
『おぉう！　豚になった、そうか……ようやく本来の姿を取り戻したんだな』
『誰が豚よ、しみじみ情感込めて言うな』
『そりゃ気持ちもこもるだろう。自分の事を天使とか言ってる頭のイカレタ奴がようやく本来の姿を取り戻したんだ。今夜は、祝杯だな』

『イカレタとか言うな、私は正常よ』
『みんなそう言うんだよ……いいんだ、俺は分かってる……本当のお前を知ってるのは俺だけかもしれない……俺だけはお前の本当の姿をずっと覚えているから……やすらかに眠ってくれ』
『なにちょっといい話風に殺そうとしてるのよっ！』
『ちっ、ノリ悪いな、死ねよ』
『何さらっと怖い事言ってんのよ』

帰ってきた場所は、なのはの家でもなく、公園でもなく、旅館の中だった。

『んで、旅館で襲われるのは本当なんだろうな？』
『ん？　今まで私が嘘言った事があった？　天使は嘘を吐かないのよ』
『ほんの数十分前の話をしてやろうか？』
『嘘は吐いてないわよ、ただ詳しく言わなかっただけで』
『それを屁理屈って言うんだよ、ガキかてめぇは』
『あら？　屁理屈も理屈の一つよ、ちょっと視点を変えた理屈とでも言えばいいかしら』
『黙れ、うるせぇよクソヤロウ』

旅館の中とはいえ、連中には言わずこっそり来ているためおおっぴらに休めない。
さっさと終わらして休みたいんだがな。

『なのはちゃんのベッドでね』
『……』

家探しは諦めた。この世界は戸籍が無い人間に厳しすぎる。

『それと今回は出番無いかもね』
『何だと？』
『来るのフェイトちゃんだし』
『……あのクソガキか』
『会いたい？』
『……別に』
『な～んか間があったわね。やっぱり気になるんでしょ？』
『うるせぇよ』
『……一つだけ言っておくわ。彼女の闇を救うのはアンタじゃない。なのはちゃん達、この世界の住人よ。アンタはあくまでもイレギュラーな存在。アンタは影からあの子達の未来を守るのよ、そうしないと本来の未来が変わってしまうからね』
『……どうした、急に真面目なトーンで話しやがって、気持ち悪いな』
『いいから、アンタは返事してりゃいいのよ』
『……ああ』
『なんか間が気になるけど、まぁいいわ。約束したからね』
『もう既に関わりすぎな気もするがな』
『それは仕方ないわ、それでも大筋は変わってないから大丈夫よ』
『なんか適当だな』
『そんなこと無いわよ。あ、でもアンタがなのはちゃんと付き合いって言うなら考えなくも無いわ、それぐらいのご褒美はあっても』
『誰がいつそんな事いった！？』
『え？　違うの？　フェイトちゃんがいいの？　はっ、まさか二人ともなんて……鬼畜ね』
『違うわこのエロボケ！』
『え？ え？　ま、まさか私を狙っているの。駄目よ私は天使、人間とは付き合えないわ……でもどうしてもっていうなら……』
『いや、それはない』
『……なんでここだけ酷く冷静に答えるのよ』

『自分の胸に聞け、あぁすまん、貧乳が気になって聞くどころじゃなかったな』
『私の胸見た事ないだろーー！』

◆

『あいつは誰だ？』

夜になってようやく、フェイトがやってきた。そばには見た事のない赤い獣

『あの娘はアルフ、フェイトちゃんの使い魔よ』
『殺していいのか？』
『……なんで最初にそんな言葉が出てくるのよ、真顔で言わないでよ、怖いわよ』
『……獣が戦っているのか……よしこっそり殺して獣の責任にするか』
『本気でやりそうで怖いわね』
『俺はいつだって本気だが？』
『……なんでそんな気に入らないのよ』
『態度』
『……』

とりあえず赤い獣の去り際にレールガンをぶっ放す。

『ちっ！　外したか』
『やめなさーい』

１０話　温泉……？（後書き）

作者「スランプです」
天使「言い切ったわね」
作者「あぁ～、話が浮かばない浮かばない」
天使「今回は前回以上に薄っぺらな話ね……」
作者「うむ、なんか悩んでもいい話が浮かばなかったので、思い切って先に進むことにした」
天使「駄目駄目ね」
作者「うわぁぁぁん！　いやでもね、とりあえず浮かんだ話だけでも先に書いてストックしようとしてるんだよ」
天使「じゃあこの先の話で出来てるのあるの？」
作者「最終話直前がもうすぐ書き終わります、はい」
天使「……まだまだ先じゃない？」
作者「……がんばるよ……」

というわけでスランプではありますが、未完で終わることだけはありません！
ミステナイデー

11話　破壊と治療

『ちっ！　仕留め損ねたか』
『アンタ……今本気で撃ったでしょ！？』
『当然！　獅子は兎を狩るのにも全力全壊だ』
『……こんなのが近くにいてなのはちゃんが影響受けなきゃいいけど……』

まぁいい、次の機会もあるだろ。

『はぁ……とりあえずここはもうよさそうね』
『次元の修正力とやらは毎回来るわけじゃないのか』
『前回フェイトちゃんで失敗してるからじゃない？　同じ素体使ってもそんなに変わる訳じゃないし』

成る程な、って事は今後あのクソガキと戦う事はないのか。

『そうね、フェイトちゃんの相手はなのはちゃんに任せなさい。多分アンタの相手は母親の方よ』
『黒幕ってやつか……そんでそいつとはどこで会うんだよ？』
『もうすぐよ……あ～、でもその前に面倒そうな相手がいるわね』
『なんだ？　強いのか？』
『強いというか……空気を読まないというか……』

よくわからんな、まぁこのクソビッチの説明下手さは今に始まった事ではないが。

『厳密には敵対するわけじゃないから、別に干渉はされないかしら』
『敵じゃないのか？』

『……アンタ次第ね……』

◆

『んで、この状況も静観しろってか？』
『えぇ、黙って見てなさい』

眼前では、再びなのはとフェイトが戦っていた。

「言葉だけじゃなにも変わらないって言ってたけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきっとあるよ」

なのはは必死にフェイトと向き合っている。
自分の思いを不器用にもぶつけていた。
しかし……それを邪魔するのは赤い獣。

『ちっ！　やっぱりあん時殺っておけばよかったな』
『……なんだかめちゃめちゃ不満そうね。でもね、アンタの力は強すぎるのよ。アンタが動けば全て思い通りにいくでしょう。けどそれは独裁者なんかと変わらないのよ。いえ、もっと酷いわね。ただの我侭な子供と一緒よ。自分の気に入らない事を思い通りにさせる。そんなのは間違ってるって思わない？』
『……だから黙って見てるんだろうが、一々うるせぇんだよ』
『そう？　分かってるならいいわ。アンタが守るべきは次元の修正力の脅威だからね』
『分かってるっつってんだろうが。何だ、もう忘れたのか？　痴呆症か？　いい病院紹介してやろうか？　一生忘れる事はないぞ。但し覚える事もないけどな』

『それって殺してるわよね……』
『死ねば治るって事だよ』
目を離していると、眩い光が結界内に広まっていた。
『あのクソガキ！　何してやがる！？』
『素手で封印してるのよ』
『馬鹿かっ！　傷ついてるじゃねぇか！？』
『行くなっ！』
『っ！』
『黙って見てなさい』
『……後で治しに行く。止めるなよ』
『……それぐらいならいいわよ』
『……ちっ』
一先ずこの場は決着が着いた様だ。
気絶したフェイトを赤い獣が連れて行くのを、後ろから追いかける。

◆

辿り着いたのは、想像と違っていた。
『このマンションか、別の世界の人間がどうやってこっちに住んでんだ？』
『アンタとは要領が違うんじゃない？』
『ダマレ、俺のせいじゃない。あいつ等の態度がおかしいんだ。ったく、たかだか家の一軒ぐらい黙って寄越しやがれ』
『いや……あん時のアンタはどう見ても強盗だったよ……』

まぁ、過去を振り返っても仕方が無い。大切なのはイマなんだ。
『過去を振り返って反省するのは大切だと思うけど……』
さて、中にどうやって入るかな。
『え？　普通にインターホン押しなさいよ』
『嫌だね』
そんな事したらまるで心配して来たみたいじゃねぇか。
あくまでも偶然を装ってだな。
『……ツンデレね』
『コロスゾ』
よしあの手で行くか。
『どうするの？』
『こうする』
「我は放つ光の白刃」
入り口付近を黒魔術で吹き飛ばす。
『ちょ、ちょっと何やってんのよ！？』
『あ？　魔術の練習中に偶然ドアを吹き飛ばしてしまっただけじゃないか？』
『無理矢理すぎる！？』
なんとなく物を壊すというとオーフェンになるな。

「誰だい！？」

そして出てきたのは、

「死・ねーーーー！」

電撃で黒焦げになった赤い獣、もとい赤い女、いや焦げた肉だった。

『これも……若さか』

『衝動を全て若さのせいにするんじゃないわよ……』

「……だ……れ……」

なにっ！？　生きているとは……ふっ、俺も甘いな。

『だから殺すなって！』

『何故だ！？　俺は気に入らない者は全て消すぞ』

『ほんの少し前にした会話忘れたの！？』

『ふっ、人間は変わる生き物なんだよ』

『とりあえず二言目にはそれ言って正当化しようとするんじゃない……』

『やれやれ、我侭な奴だな』

『アンタね……』

目の前には、焦げた肉、いやゴミがうずくまっている。

『目障りだな』

『自分でやっておいて……』

とりあえず、放置して中に進むか。用があるのはフェイトだしな。ゴミを通り過ぎる際にうっかり踏んでしまったが、まぁ気にする必要はないだろう。なんか「ぶぎゃ」とか聞こえたが、幻聴だな。ゴミが喋る訳が無い。俺も疲れてるのかな。

『もうゴミとしてしか扱わないのね……』

奥に行くとフェイトはいまだ気絶しているのか、ソファで横になっていた。
そして手には包帯の後。一応治療はしたのだろうが、その傷はすぐに癒える事はないだろう。

「我は癒す斜陽の傷痕」

包帯を解かず、そっと傷痕を治す。

『帰るか』
『あれ？　話していかないの？』
『俺は治療しにきただけだ』
『……素直じゃないわねー』

このクソガキはなんでここまで無理するんだろうな。

『お前は知っているのか？』
『勿論、知ってるわよ。教えないけど』
『……そうだな』
『あら、教えろって騒がないんだ』
『人に聞くもんでもないだろ』
『……そうね、本人に直接聞きなさい』

いつかこいつは全てを話せる様になるのだろうか。

『大丈夫よ、この娘は強いから』

『……そうかよ』

帰る寸前にフェイトは目を覚ましたようだ。

とはいえ、まだ意識ははっきりと覚醒しておらず、その目はトロンとしている。

「……きさらぎ、さん？」

「じゃあな、あんま無茶してんじゃねぇぞ」

そしてテレポーテーションでマンションから脱出した。

『……玄関壊した意味あったの？』

『ゴミを処理できただろ？』

１１話　破壊と治療（後書き）

作者「フェイトが出てくるとやけにシリアスになります」
天使「……このアルフの扱いはいいのかしら」
作者「……」
天使「それにしても前回といい、原作キャラとの絡みが減ってない？」
作者「次回か次々回、まぁぶっちゃけるとＫＹ辺りでまたちゃんと絡む予定だ」
天使「ＫＹの扱いはどうなるの？」
作者「……星に……いやなんでもない」
天使「……ところで家探しの話は書かないの？」
作者「いずれ番外編で書こうかなとは考えている」

もし番外編でこんなの読みたいなんてのがありましたら、是非教えてください。
では次回もよろしくお願いします。

12話　たった一つの冴えたやり方……？

『勝ったら話を聞けって中々に横暴だよな』
『しかもこれって別にアンタの影響じゃないのよね……』
『まるで不良みたいな奴だな』
『……可愛らしいなのはちゃんはどこへ行くのかしら』

そう、目の前ではなのはとフェイトが戦おうとしていた。そしてなのはの言い分にフェイトは無言で受けたようだ。

『あっさり頷くとか、あいつはあいつで変に潔いよな』
『……漢らしいわね』
『まぁいいか、お互いが納得して戦うなら決闘だ』
『あら、今回は何にも言わないのね』
『ガキ同士が殴りあってお互いを知るのも悪くは無いだろ』

ちょっと古臭い漫画みたいなノリだがな、嫌いじゃない。
夕方の公園っていうシチュエーションもベタな感じでいいよな。

『それにしても、なんつーか完全にヤンキー漫画の展開だな』
『……そうね』

さて、これまで負け続きのなのははフェイト相手にどこまでやれるのかね。
そして睨み合っていた二人はあの謎の棒を振りかぶった。

『おいおい、相手を撲殺する気かよ魔法少女、魔法使えよ魔法。なんでやたら暴力的になるんだよ』

完全に野次馬観戦モードになってしまった。

「ストップだっ！」

と、そこに割り込んできたガキが一人

「ここでの戦闘は危険すぎる」

なのはとフェイトの間に割り込み、決闘を邪魔しているようだ。

『……おい』

『ハ、ハイッ！　ナ、ナンデショウカ？』

『ようやくいい感じで始まりそうな所をタイミングよく邪魔する空気読めないバカは殺していいよな』

『できれば～、その～、遠慮……して頂きたいのですが』

『……わかった』

『ほっ』

『殺しはしない』

『……とっても嫌な予感がするわ』

気づけばボケガキはフェイトを攻撃してやがる。

赤い獣がフォローにまわっているが、まずいな。

「これ以上戦闘行為を続けるなら」

「どうだっていうんだよっ！」

偉そうなボケガキにレールガンをぶっ放す！

「っ！」

大げさに回避しているが、当てるつもりは無い。
あいつらを逃がすための時間稼ぎだ。

「てめぇはさっさとフェイト連れて逃げてろ」

上手く逃げれたようだな、一先ずはこれでよし。
後はこいつか。

「で、どうだっていうんだよボケガキ」
「クロノ・ハラオウンだ、ボケガキじゃない」
「あぁん？　んなこたぁどうでもいいんだよ。なんで邪魔してんの言えよボケ」
「この世界での魔法の使用は禁じられている」
「はぁ？　誰が禁じてんだよ？」
「時空管理局だ」
「……要はてめぇらが勝手に禁止して、勝手に邪魔してるって事だろ」
「……必要な事だ」
「知るかボケナスがっ！　てめぇらの都合なんざこちとら知ったこっちゃねぇんだよ！！」
「ならば拘束させてもらう」
「やれるもんならやってみろや……あぁその前に一応聞くがな」
「なんだ？」
「年はいくつだ」
「１４だが？」
「そうか、俺は１８だ」
「……それがどうかしたか？」

ふぅ、と一息つく
こんな馬鹿は久しぶりだな、さてどうしてやろうか

『分かってるわね分かってるわよね！　殺しちゃ駄目よ！　ほどほどにねっ！』
『……ワカッテル』
『分かってない絶対分かってないわよねソレ！？』

まぁ、ビッチは言いとして今は目の前のボケに常識というものを教えてやらなければならない。

――年長者として

「敬語使えやボケナスがーーーー！！」

年下の癖に生意気なんだよっ！！！

「喰らいやがれっ！　刺し穿つ死棘の槍≪ゲイ・ボルグ≫」
「ぐあぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

その場に倒れ付すボケガキ

『ふっ』
『……ねぇ』
『なんだ？』
『殺した……の？』
『物騒な事を言うんじゃねえよ、殺しは無しだって言ったのはてめぇじゃねぇか』
『そ、そうよね、ちょっと気を失っただけよね』
『あぁ、ちょっと心臓を打ち貫いただけだ』
『……え？』
『はぁ、なんだ耳まで遠くなったのか。どんだけポンコツなんだよ、

もう死んでしまえよ。いいか、優しい俺様はもう一度だけ言ってやる、軽く心臓を貫いてやったんだよ。これまでの無礼な行いを僅か一発で許してやるとか俺の心の広さはまるで宇宙の様だな。俺みたいな心の優しい人間だけなら、きっと世界は平和になるぞ』

『……心臓貫いたら死ぬじゃない！！』

『……おぉ！』

ポンッと手を打つ。そうか、そういう考えもあったな。

『それが常識よ！　どどどどうするのよっ！　死んじゃまずいのよ！』

「えっと、如月さん？」

気づけばなのはも心配そうにこちらを見てくる。

「だ、だいじょうぶ……ですよね？」

「はぁ」

仕方ない、まるで天使の様に……いやこいつと同じはごめんだな。まるで神のように心の優しい俺様はボケガキに、全て遠き理想郷≪アヴァロン≫を埋め込んでやる

「……うぅ」

どうやら無事回復したようだ。

意識を取り戻し、現状を理解しようとしている。

「ここは……ぼくは」

「刺し穿つ死棘の槍≪ゲイ・ボルグ≫！」

「ぐあぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

『ちょっとーーー！！　せっかく生き返ったのに何してんのよーー！！』

『はっ、すまん。ついイラッとして』

「きさらぎさん！」

むぅ、なのはまでこっちを責めてきやがる。

ちょっとしたお茶目じゃないか。

『アンタはお茶目で人を殺すのか！』

『人聞きの悪い事を言うな。殺してないだろ』

「……うぅ」

そう、全て遠き理想郷≪アヴァロン≫の効果を甘く見るな。

「ぼくは……ぐっ！」

再び意識を取り戻したボケガキの後頭部を踏みつけ、地面にめり込ませる。

「さて、ここからは教育的指導の時間だ。刃向かえば大変な事になる」

「なんだ、貴様は！　くっ、足をど――」

「刺し穿つ死棘の槍≪ゲイ・ボルグ≫！！」

「ぐあぁぁぁぁぁ！！！！！！」

やれやれ、人の話を聞かないっていうのは悲しいねぇ。

「ちょ、ちょっと待ってくれる」
と、そんな最近の若者の常識の無さを憂いていたら空中に謎の女が現れた。
「なんだてめぇは？」
「その子の上司よ」
「はっ！　上司だったらこの態度だけ偉そうなボケガキにもうちょっと常識を教えてやれよ」
「……そうね、ごめんなさい」
「……くっ！」
意識を取り戻したボケガキが悔しそうに呻いている。
……俺の足に踏みつけられた状態で。
「んで？　てめぇらはなんだよ？　自殺志願者か？」
「おい……」
「あぁん？　なんだよ、まだ反抗したりないってか？　やだやだ、これだから乳離れもまともに済んでない反抗期は」
「……艦長は君より年上だ……敬語……使えよ」
ぷちっ
『……きれたわね』
「……きれましたね」
ビッチとなッチが同時に何かほざいているがもう俺には何も聞こえていなかった。
ふぅ、俺とした事が一瞬で心臓を破壊して終わりなどなんて生ぬる

い事か。
痛みを痛みととして理解する事で初めて家畜は学習するというのに。
だからこそ改めて教えてやろう。
貴様が如何に愚かであるかを。

集中する。
周囲の雑音が聞こえなくなるまでただ集中する。
開放するはただ力はただひとつ。
だがそれは同時に最強の一手でもある。

この力に意味は無い
力はただ力として存在するのみ
なればこそ、その力を如何にして使うのか
その力の用途にこそ、存在が問われるのだ
そう、今はただ……

――この馬鹿に鉄槌を下すために！！

「――出番だエア」

周囲を圧迫する膨大な魔力。
その全てをただ一点に注ぎ込め。
「天地乖離す開闢の星≪エヌマ・エリシュ≫」

そのイメージに限界は無く
そのイメージに無駄は無い
ただ一つの目的のために生まれたソレは
ただ一つの目的を果たし消えていく
後に残るのは残骸のみ
そして後に残すのは――

◆

ガクガクブルブル
恐怖だった。
いやー、ちょっとしたお茶目でうっかり本気で攻撃したらすげぇ脅えやがった。
『……あくまでお茶目で済ますのね』
『問題ないだろ？』
なんだよアヴァロンのお陰で死なずに済むんだからいいじゃねぇか。
『ん？　死なないって事はこの先もどれだけやってもいいって事だよな』
『……ちゃんとイメージし続けなさいよ』
むぅ、アヴァロンをずっとイメージし続けるのも面倒だな。
「あのー如月さん、話聞いてますか？」
「ん、あぁ聞いてるぞ。どうやったらあのボケガキを世間的に抹殺できるかという有意義な会議だったな」
「……聞いてないですね」
冗談だ、今はよく分からん船？　に乗せられ艦長とやらから説明を受けていた。
「ジュエルシードに関してはこちらの任務です」

要は手を引けと、そういう事か

「でも！」

なのはと獣はそこに食い下がっていた。

『んで、どうすりゃいいんだ？』

『なのはちゃんの好きにさせたらいいわよ』

『相変わらず自己主張の無いビッチだな』

「貴方は……どう思っているのかしら？」

「あぁん？」

こっちに振るんじゃねぇよ、メンドクセェ。

まぁ、とりあえずビッチの方針で行くか

「俺はなのはのやりたい様にやらせるだけだ」

「……如月さん」

……なんだか、じーんと感動したような顔でこっちを見てくるのが気になるんだが……

「それは場合によってはこちらと敵対する意思もあると？」

「そうだな、なのは次第か」

「わ、私そんな事考えてませんよ！」

ちっ、つまらん。

こいつら全員、ぶっ殺してやんよーぐらいの事言いやがれよ。

『物騒すぎるわ！』

まぁ、結局この日はこのまま解散。
返事はまた今度ってか。

「ちょっと待ってもらえるかしら」
「あぁん？」
「貴方のその力は……」
「うるせぇよ、気にすんじゃねぇよ。ぶっ飛ばすぞコノヤロウ」

メンドクセェ……説明なんかしてられっか。

「そういう訳にはいかないわ、見た事も無いレアスキル。場合によってはこちらで――」

その言葉の先を続ける事は無かった。
艦長とやらの首にエクスカリバーを突きつけたからな。

「黙れ、それ以上余計な事言ってると遊びじゃすまなくなるぜ」
「っ！」
「まぁ、悪い様にはしないから安心しな」
「その言葉を信用しろと？」
「ガキじゃねぇんだろ、信用するかどうかはてめぇで決めろよボケが。あぁ、信用できないならそれでもいいぜ。ただちょっとばかし面白く無い事が起きるだけだ」
「……」
「じゃあな」

『やれやれ、無償で世界を守っている心優しき男をこうも信用できないもんかね』

『……脅迫までしておいてどの口が優しいなんて言うのよ』

１２話　たった一つの冴えたやり方……？（後書き）

作者「ふぅ、ようやくＫＹ登場か」
天使「そして退場ね、これってＲ－１５指定とか残虐要素ありとか書かなくていいのかしら？」
作者「……ギクッ」
天使「いくらコメディーといっても心臓貫くとか……大丈夫なの？」
作者「ほ、ほらっ、ちょっとしたお茶目だって如月も言ってるし」
天使「お茶目で殺人起きてたまるかーー！」
作者「ですよねー！」
天使「まぁ、いいわ。クレーム来ない事を祈りましょう。
作者「ソウデスネ」
天使「それはそうと、なのはちゃんとのフラグ立てすぎじゃない？」
作者「だって一番好きなキャラはなのはですから」
天使「……分かりやすいわね」

活動報告にも書きましたが、あと５話ぐらいで終わる予定です。
最後までお付き合い頂けると嬉しいです。
皆さんよろしくお願いしますっ！

13話　その先に見える者

「んで、民間協力って事で落ち着いたのか」
「はい、ユーノ君と一緒に決めました」
「そうか。まぁ頑張れや」
「はい！」

『協力者ねぇ、なんかいいように使われるんじゃねぇのか？』
『大丈夫よ』
『最近そればっかだな、これだから語彙の少ない馬鹿は……たまには気の利いたセリフでも言えよ』
『……たとえばなによ？』
『「けいおん！！が終わったので死にます」とか？』
『意味がわからないわよ！　まず会話が繋がってないじゃない！？』
『我がままだな……じゃあ「死にます」だけでいいよ』
『それ言わせたいだけでしょうが！』
『そりゃあなぁ、いつまでも脳内にいられると気が休まる時間が無いしな、プライバシーって知ってるか』
『あ、う、そ、それは……わ、悪いとは思ってるけど……』
『……は？』
『だ、だから悪いとは思ってるけど……これも私の務めだし……（ゴニョゴニョ）』
『……お前は誰だ？』
『え？』
『俺の知っているビッチは、悪いなんて言うわけが無い！　もっとこうあれだ、「はぁ、寝言は寝てから言ってください」とかそういうキャラだった筈だ！！』
『いや～、そんなセリフ言った事ないんだけど……』
『なにっ？　そうだったか、じゃあアレだ「ぴぴるぴるぴるぴぴる

ぴー」とか』
『その天使じゃないわよ！』
「それで、如月さんも良かったらアースラに行きませんか？」
「あぁん？」
っと、なのはの話の途中だったな。
『どうしたもんかな？』
『どっちでもいいんじゃない、行かないならまたいつものようにこっそり後をつけるだけよ』
『……まるでストーカーだな』
「あ～、そうだな俺も行こうか」
「え？　ほ、ほんとですか！？」
「あぁん？　んだよその反応は？　本当は来てほしくなかったのかよ、社交辞令かよクソヤロウ」
「ちち違います！　ほんとに来てくれるとは思ってなかったので……その、嬉しいです」
……ほんのり赤くしてんじゃねぇよ。
『……予想以上の好感度ね』
『……うるせぇよ』

◆

この前も来た船、アースラとかいうのに来たのはいいんだが……

ガクガクブルブル

ちらっと目が合っただけで、怯え始める奴がいた。

『まだビビッてんのかよ……めんどくせぇ』

『……何回も殺されればトラウマになるわよ……』

とはいえこのままってのもなぁ、まるで俺がいじめっ子みたいじゃねぇか。

『まるでもなにもそのまんまよね……』

『はぁ？　何言ってんだビッチ、俺はラブ&ピースな人間だぜ』

『そんな人はビッチなんて言わないわよ！』

『ちっ、うるせぇな。じゃあ、おビッチ様でいいか？』

『……もうなんでもいいわよ』

最近ノリ悪いな、つまらん。

「おい！」

「ビクっ！」

いやいやいやいや、声でビクッって言うなよ。

「まぁ、アレだ。そんなビビッてんじゃねぇよクソヤロウ」

「な、び、ビビッて何かいない！」

「ほぅ、ゲイ・ボル」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさ

いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「分かればいい」
「ほっ」
「あぁ、でもアレだ」
「……何だ？」
「だから敬語使えってゲイ・ボルグ」
「ぎゃあああぁぁぁぁぁ！！！」

『そんな世間話風に殺らなくても……』
『朕は大切だろ？』

◆

「それで、あいつは見つかったのか？」
「えぇ、これを見て頂戴」

リンディとやらがが言うには、フェイトが見つかったという。
しかし、その画面に映る光景は……

「そんな……」
「まずいな」

無理やりジュエルシードを暴走させたのだろうか、海は荒れ狂い、
それを封印しようとするフェイトはボロボロになっていた。

「あの！　私急いで現場に！」
「その必要は無いよ。放っておけばあの子は自滅する」
「それで力尽きた所を狙うってか、やり方がまるでハイエナだな。人間としての誇りはねぇのか？」
「なんとでも言えばいい。僕達のやる事はあの子の逮捕だ。その為なら手段は選ばない」

まぁ、正論といえば正論か……しかし

「……でも」

それでこいつが納得するかな。

「……なのは」
「……はい」

そうだな。
迷ってる顔をしてるって事は、もう決まっているんだろ。

「行け」
「……え？」
「行ってお前のやりたいようにやって来い」
「如月さん……」
「獣、お前はゲートを使えるか？」
「はい。なのは、僕も如月さんと同じ気持ちだ」
「でも、これは私の我侭で……」
「ガキは我侭言うもんなんだよ、さっさと行けよ馬鹿野郎」
「君達は何を言っている！　これは子供の遊びじゃないんだ！」
「はっ！　なんだ邪魔をするのか？　お前に俺を止められるのか？」

「っく！」
さすがに無理な事は理解していたか。
悔しそうな表情を浮かべているが……それだけだった。
「なのは」
「はい」
もう邪魔は無い。
「行って来い」
「はい、行ってきますっ！」

◆

その後、強引だが無事にジュエルシードの封印には成功した。
だが……
『おい』
『なに？』
『あいつは何だ？』
『プレシア・テスタロッサ、ジュエルシードを集めている張本人よ』
『テスタロッサ？　フェイトの母親か……それがなんでフェイトを攻撃する！？』
そう、封印が終わったと思ったら明らかに人為的な雷が落ちてきた
……フェイトを攻撃するように。

『……』
『そいつはどこにいる！』
『……』
『答えろよクソビッチ！！』
『……その時が来れば分かるわ』
『てめぇは！　全てを見透かしたような口調で神様気取りってか！
ふざけんじゃねぇよ、さっさと言いやがれよボケがぁぁ！！』
『……』
『ちっ！』

相変わらず肝心な事は話やがらねぇ。

『フェイトは無事なんだろうな？』
『……えぇ、大丈夫よ』

……本当にそれしか言わなくなってきたな。

『もうすぐ……全部終わるわよ』

その声は小さかったが、脳内に直接響く音を聞き逃す事は無かった。

『……そうかよ』

１３話　その先に見える者（後書き）

作者「ちなみに作者はけいおん！！を見てません」
天使「いきなりそこかい！」
作者「漫画は読んでるんだけどなぁ、アニメはなんだか敬遠してしまう。あぁでも、あずにゃんは可愛いと思います」
天使「心底どうでもいいわ」
作者「今回は次への繋ぎって感じの話でした。ちなみに今更ですが基本的な原作のシーンは省略しています」
天使「本当に今更ね」
作者「次回はなのはＶＳフェイトは軽く触れて、メインは傀儡兵との戦いになると思われます」
天使「久しぶりにまともな戦いになりそうね」
作者「……」
天使「なに、その無言は！？」
作者「ではまた次回！」
天使「おぉいっ！」

１４話　放たれた矢

「さて、それでこれはどうしたもんかな」

目の前の惨状に思わず呟いてしまう。

『何よ？　アンタも決闘ならいいんでしょ？』

『どこのスーパーサイヤ人の戦いだよ……』

空を見上げると無数のピンクと黄色の光が交差している。

魔法を知らない人間が見ればそれは綺麗で幻想的な光景かもしれない。

『予想以上だな』

そして、最後のスターライトブレイカーとやらの威力は凄まじかった。

軽く大陸崩壊とかしそうだな。

『とりあえず決着ってか』

『……そうね』

『まだ何かあるのか？』

『どうしてそう思うの？』

『質問に答えろよクソビッチ』

『……来るわよ』

『なに？』

その瞬間、空から雷が落ちた。

「……フェイト」

再び、フェイトは雷に身体を貫かれた。

『……おい』

『さて、これでアースラもプレシアの居場所は分かったわ。そこで次元の修正力は干渉してくるはずよ』

『……お前は』

『勘違いしないでよ、私は本来あるべき未来を取り戻したいだけ』

『……』

『行きましょう。それに悪いようにはならないわ』

『あれが悪いようじゃないっていうのか？』

視線の先にはボロボロになったフェイトとそれを心配するなのはの姿。

あれを見て悪くないと思える奴はいないだろう。

『そんな事ないわよ、だって生きてるじゃない。それに』

『……そのお陰で強くなるってか』

『その通りよ』

その言葉に反応したかの様に、一陣の冷たい風が頬をそっと撫でていった。

まるで何か悪い事が待っているかのような冷たさで。

◆

そしてアースラに戻るとフェイトが倒れていた。

「何があった？」

「如月さん……フェイトちゃんが……」

「どうした？」

「……」

フェイトは無言のまま、ピクリともしない。

『彼女はクローンなのよ』

『クローンだと？』

『そうよ、プレシアの都合のいいように扱われていたの』

『……そして捨てられたってわけかよ』

『そうよ』

ショックで精神崩壊ってか。

ちっ、笑えねえな。

「プレシアはどこだ」

「場所はもう掴んでいるわ。クロノ行けるわね？」

「はい、現地へ向かいます」

当然の様にビビリを派遣する。

「俺も行くぞ、ビビリが一人で行った所で何もできないだろう」

「誰がビビリだ！」

「……敬語」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさ

いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「やれやれ、どう見てもビビリだな」

「うぅ」

ちょっと涙目になってやがる。

男が簡単に泣くんじゃねぇよ。

「……私も行きます」

「僕も！」

「はっ、間違いなく危険な場所だぜ？　その場のノリで簡単に言うんじゃねぇよ」

「……ノリで決めたわけじゃありません。私も……私も力になれると思うんです」

そういうなのはの横には未だ反応を見せないフェイトがいた。

これまで何度もなのはが戦ってきた相手。しかしフェイトを見るなのはの目は、純粋に心配しているものだった。

「なのは、お前にとってフェイトは何だ？」

「友達になりたい子です」

迷わずに真っ直ぐ告げられた言葉はとても強かった。

『最近の小学生は違うな』

『アンタだって、社会的には子供なんだけどね』

◆

そしてプレシアのアジトに突入……したはいいんだがた、この数はうざすぎる。
ファンタジーって感じの敵がざっと千。
レールガンで応戦してるが、焼け石に水だなこりゃ。

『プレシアってのは修正力の干渉を受けてんのか？』
『受けていないでしょうね。基本的に戦わない相手は干渉されないはずよ』
『ん？　プレシアとは戦わないのか？』
『そうよ、戦うのは目の前のこいつらで最後。この異常な数は干渉を受けているせいね』

つー事は、こいつらさえなんとかすればいいってか。

「おい、俺が道を空ける。その隙にプレシアの所へ行け」
「如月さんは？」
「こいつらぶっ殺してからだな」
「無茶です！　いくら如月さんでも」
「うるせぇよ獣！　てめぇは黙ってなのはのフォローしてろ」
「……お願いします」
「なのは？」
「如月さんは、やるって言った事はちゃんとやる人なの」
「おいおい。お前が俺の何を知ってるんだよ」
「知ってますよ。乱暴だけど本当は優しい所とか」

「はっ、お前の目は節穴だな。そんなんじゃ悪い男に引っかかるぜ」
「そうですね。例えば如月さんですか」
「はぁ？　何いってやがんだよ、死ねようぜぇ」
「む～、すぐ誤魔化しますね」
「誤魔化してなんかねぇよ。つーかガキに興味ねぇよボケ。喋ってる暇あんならやるぞ」
「分かりました。お話は終わってからですね」

あぁ、うぜぇ。なんだこいつ。最初と大分キャラ変わってねぇか？

『愛の力ね』
『お前には縁の無い物だな』
『……』
『……本気で落ち込むなよ』
『……しくしく』
『うっぜぇぇぇぇ。ったく、これ最終決戦ってやつだよな？　なんでこんなアホな空気になってんだよ』
『いいじゃない。アンタにシリアスな空気なんて似合わないわよ』
『はっ。そうかよ』

じゃあ、サクっとやるか。

道を空ける為、お決まりになったエクスカリバーをイメージする。

『他にはなんか無いの？』
『うるせぇよ、手っ取り早いんだよ。無闇に技増やしても面倒なだけだろうが』

そして早くも馴染んできた剣を両手で構える。

「エクス」

剣の力を解き放つ――その瞬間。

「やれやれ、ザコでは話にならんか」

どこかで聞いた覚えのある声が背後から聞こえてきた。

思わず声をした方に振りむくと、赤い外套をまとった男が物陰にひっそりたたずんでいる。

手には弓を構えて……

「偽・螺旋剣（カラドボルグ）」

そして放たれた矢が向かう先は……

「……な」

背後から放たれた矢によって、なのはのいた場所を中心に巨大な爆発が起きた。

その不意を突いた一撃に、なのはは最後まで反応する事はできなかった。

――そう、防ぐ事もかわす事もできなかったのだ……

１４話　放たれた矢（後書き）

次回予告

――なのはが死んだ。

フェイトが現場に向かって知らされたのは衝撃の事実だった。

母親だと思っていた人に捨てられ、何度も手を差し伸べてくれたあの子もいなくなってしまった。

そんな絶望に打ちひしがれていたフェイトに声をかけたのは――若きジェイル・スカリエッティだった。

そして聞かされる衝撃の事実。

なのはの死には如月千早が存在するせいだという。

如月への復讐、そしてプロジェクトＦによるなのはの復活。

その想いを胸に、フェイトは再び立ち上がった。

そしてそれから月日は流れ、フェイトが１９歳になった時、物語は再び加速する。

魔法少女リリカルなのは　～逆襲のフェイト～

現在　脳☆内☆妄☆想☆中

なのは「少し、頭冷やそうか？」

◆

作者「……」
天使「……アンタは何がしたいのよ？」
作者「いやー、Ａ，ｓのストーリー考えてたんだけど、いっそオリジナルにしようかと……」
天使「で、この結果と？」
作者「……ちょっと頭冷やしてきます」
天使「そうしなさい」

15話　混乱、そして……（前書き）

話が進んでない……そして短いです。
……ごめんなさい。

15話　混乱、そして……

「偽・螺旋剣（カラドボルグ）」

赤い外套をまとった男はなのはの背後から矢を放った。
その姿、その技から男の正体は考えるまでもなく思い当たる。

【アーチャー】

英雄として世界を救い、そして絶望した男。
そいつは明らかになのはを狙い、なのはを殺す為の一撃を放っていた。
なのはは気づいていない。
咄嗟にテレポートを使う……としたその瞬間、脳に激痛が走る。

『っう……』

痛みによりイメージはできず、その場に崩れ落ちかける所を何とか踏ん張る。
そして手元にまだ持ったままだったエクスカリバーはぼんやりと形を崩していた。

――異なる世界の技を同時に使用する事は脳が拒絶する。

それは障り猫の時に感じた痛み。
イメージの限界による痛み。
これらは万能の力ではないという事の証明。

力の……限界。

手元の剣は既に無い。

もう一度と思い、なのはのいる場所へと目を向ける。

――矢はなのはのすぐ真後ろまで来ていた。

なのはは未だに反応できていない。

すぐ後ろまで来ているというのに。

振り向いて手を伸ばせば届く距離まで来ているというのに！

そこから最悪のイメージが連想される。

……死

……死ぬ？

……あのなのはが死ぬのか？

――初めて会って泣きそうになった時の事。

――公園にサンドイッチを持ってきた時の事

――封印に失敗してもそれでもやり遂げた時の事

――なのはの部屋で一緒に寝た時の事

――そして……なのはの優しい笑顔

まるで走馬灯の様に流れていくなのはとの記憶。
そしてその間にもゆっくりと矢は進んでいく。
まるで世界がスローになったかのように……残り数十センチの距離を……ゆっくりと進んでいく。

まだだ！　まだ間に合う、まだ……

けれど身体は上手く動かない。
思考がまとまらない。
イメージがまとまらず、気ばかりが焦る。

絡まった思考からは何も生まれず、パニックになった脳からは何もイメージする事は出来ない。
普段あんなに簡単に出来た事が……今は出来なかった。

早くしねぇと！
早くなのはを助けねぇと！
早く早く早く！！

――俺が全部守ってやればいいんだろうが

脳裏に浮かぶのは俺が最初に言った言葉。
守ると……こいつを守ると初めに誓った言葉。
俺は、誓いを破るのか？

――俺達は人間なんだ、失敗なんかして当たり前だ！

そうだ、なのはに言ったじゃないか。
失敗なんかして当たり前だ。
失敗は誰にでもある。
俺だって……失敗する事もあるんだ。

――大切なのは失敗したその時どうするかなんだよ！

どうする？
どうするんだ？
……どうすればいい？

その失敗が取り返しのつかない物だったら……俺はどうすればいいんだ？

最悪のイメージばかりが、脳裏に浮かんでいく。
そしてそれは現実に起こりえようとしていた。

現状を理解できない。
これから先起こる事を理解できない。

――もうどうすればいいのか……ワカラナイ

「あああああああああああああああああああああ」

……ただゆっくりと進んでいく矢の姿だけがはっきりと見えていた。

そして、辺り一面を覆いつくす爆発がおきた。

15話　混乱、そして……（後書き）

天使「……」
作者「……」
天使「……」
作者「……何で無言？」
天使「……出番が無かった」
作者「あ、そこに反応するんだ」
天使「……しくしく」
作者「え～、こいつは置いといて。読者の皆さん、話が全く進んでいないやら、短いやら色々とすみません。次回はもうちょっと頑張ります」
天使「……私を出せ」
作者「無印編は以前あと5話予定と言いましたが、少し伸びそうです。キリがいい20話ぐらいで終わらせようかなぁと考えてます」
天使「……もっと私メインの話を書け」
作者「主人公がやけにへたれになってますが生暖かい目で見守ってやって下さい。それではまた次回！」
天使「無視すんなやぁぁぁ！」

16話　信頼

「はは」

不意に声が吐いて出た。
目の前の状況に自然と声が出てしまった。
爆発により、地面には数十メートル規模の巨大なクレーターが出来ている。
この直撃を受けて生きていられる者など、そうはいないだろう。

「はははははははははははははは」

笑いが止まらなかった。
もう笑う事しかできなかった。
何も出来なかった自分。
無様にもパニックになった自分。
誓いを守れなかった自分。

――無力な自分

「はははははははははははははははははははははははははははははははははは」

笑い声は止まらない。
壊れたラジオの様にひたすらに笑い続けた。
まるで自らの弱さに泣いているかの様に。

けれど涙がこぼれる事はなかった。
自分の弱さを知り、瞬間とはいえ絶望を味わった。

けれどそれは自分がなのはに言った時と同じだった。

俺は失敗をした。
あの巨大な木の時はなのはが失敗して、今度は俺が失敗したのだ。
落ち着いてイメージすれば間に合ったかもしれなかった。
そもそもエクスカリバーをすぐに消さなかった事が問題だ。
イメージの力は無敵ではないし、万能ではない。
障り猫の時にそれは既に知っていた事実……なのに俺は過信したままでいた。
次元の修正力という脅威がある事を周囲に知らせず、自分だけで解決しようとした……それがこの結果を生んだのだ。
そう、自分で言った事じゃないか。俺達は人間なんだと、失敗しない人間なんかいないのだと。
それなのに俺は独りで守ると……傲慢にも誓ってしまった。

――それこそが最大の失敗だったのだ。

ならばこの状況は受け止めるべきなのだろう。
俺は無様にもミスをして、俺は守ると誓った少女を守る事ができなかった。

ずっと見ていた。
見ていることしか出来なかった。
目をつむることも、逸らす事もできずに、ただ馬鹿みたいに突っ立って、爆発が起きる最後の瞬間までずっと見ていた。
なのはの背後から狙われたその一撃を。
なのはの背中を狙って放たれた矢を。

俺はずっと見ていた。

――その矢が地上に刺さる所を俺は見ていた

「怪我……無い？」

爆発が起きた場所の上空に彼女達はいた。
アースラにいるはずのフェイトが何故かそこにいた。
矢が刺さるその瞬間、フェイトはなのはと矢の隙間に入り障壁で矢を逸らした。
そして逸らされた矢が地上に刺さり、爆発するその衝撃から逃げるためになのはを抱えて上空へ飛んでいたのだ。
いわゆるお姫様抱っこをしているフェイト。なのはを見る瞳は本当に心配している様で、ついさっきまで戦っていた時の様子とはまるで別人だった。

「……フェイトちゃん」

そして助かったなのははというと、自分が助かった事よりもフェイ

トがここにいる事。そして自分を助けに来てくれたという事実が何よりも嬉しいようで、今にも泣きそうな笑顔でフェイトを見つめていた。
その状況を見て、俺は自然と頬が緩むのを抑えられなかった。

俺は失敗した。
けれど、この状況はどうだ。
フェイトがなのはを助けた。

――友達になりたいんです。

なのははそう言っていた。
そしてその願いを叶えるために何度も声をかけてきた。
諦めずに……何度も何度も、フェイトと向き合ってきたのだ。
そして今ようやくそれは実を結ぼうとしている。
だからこの状況を生み出したのはフェイトである同時に、なのはでもあるのだ。

――俺は守ると誓った少女達に、逆に守られたのだ。

誓いは果たせず、失敗した。
けれどなのははどうだった？
失敗して、絶望して、それでなのははどうした？
独りでは出来ないと感じたなのはは、俺に何て言った？

――私に力を貸してください！

思い出すのは強い意志を秘めた瞳。
失敗しても立ち上がったなのはの強さ。
それはただ俺が守ってやるだけの少女では無かった筈だ。

そうだ、俺は確かに失敗をした。
そしてその失敗はどうやっても取り返しのつかないものになる寸前だった。
けれど助けられた。
なのは、フェイト……守る筈だった少女達に……俺は助けられていたのだ。

まだ間に合う。
俺にはまだやり直す機会が与えられた。
あの時のなのはの様に、ただ失敗したからといって落ち込んでいる場合ではない。
まだやるべき事はある。
敵はそこにいる。
ならば俺もまた立ち上がろう。
進むべき道にはさっきまで戦っていた沢山の敵がいる。
そして反対側には強大な敵。
同じ失敗は繰り返さない。

――あの時の、なのはの様に……俺も

◆

「フェイト、助かった」
俺は自然と感謝の言葉を口にしていた。
「いえ、あの」
フェイトは感謝される事になれていないのか、戸惑った様子を見せている。
しかし、それに構わず今度はなのはに声をかける
「なのは、さっきの言葉な。訂正するわ」
「え？」
「道を空けてやる事ができなくなった」
千の敵よりも手ごわい相手、アーチャーの方を見る。
再び攻撃をしてくるかと思ったが、何を考えているのか、動く様子は無かった。
そして俺はアーチャーから視線を外さず、言葉を続ける。
「俺一人じゃあ、こいつの相手で精一杯だ」
背後のプレシアの所へ進む道を守る敵。
そいつらを蹴散らしつつ、なおかつ英雄の相手をする事は無理だろう。
天使が言うには、通路を塞いでいる敵にも次元の修正力による干渉を受けている。
だからこれはどちらも俺の敵。
なのは達は本来なら相手をしなくてすんだ敵。

「だから……」

次元の修正力が無ければ問題は無かった敵が、一変して脅威になる事は経験している。
さっきまでは大丈夫だった……けれどこの先も大丈夫なんて保証は無い。
これは賭け。
けれど、本来なら未来なんてわからないもの。
だからこれは賭けなんて言葉で表すものではないだろう。
そんな言葉で表現していいものではない。

――これは信頼だ

彼女達を信頼して、彼女達なら大丈夫だと信じる事。
次元の修正力は俺の問題……けれど俺はそんな彼女達に、助けを求めた。
やってくれると信頼して、大丈夫だと信じて……

「だからそっちは任せる」

「「「「「はい！」」」」」

その返事に迷いは無かった。
なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、クロノ。
五人とも、迷い無く返事を返してきた。
その反応に自嘲めいた笑みが浮かぶ。

――初めからこうしていればよかったんだな。

俺はこいつらを守ると誓った。
けれどそれは間違いだったのだ。
一方的に守るのではなく、お互いが守るべき存在にならなければいけなったのだ。
こいつらは力の無いガキじゃない。
守られてるだけのガキじゃない。
何度も戦う姿を見てきたのに、そんな当たり前の事実に……俺は今更ながら気づいた。

『……大丈夫なの』
『あぁ、大丈夫だろ』
『ちょっと！　もし何かあったらどうするのよ！？』
『知らねぇよ、けど大丈夫』
『……何か根拠はあるの？』
『んなもんねぇよ……ただてめぇが言ってたじゃねぇか』
『なによ？』
『あいつらは強いんだろ？　だから大丈夫だ』

その言葉に天使は絶句したようだ。
俺は天使を無視して、話を先に進める。

「じゃあ役割変更だ。俺はここで敵をぶちのめす。通路の敵はお前らに任せた」
「はい、如月さん、気をつけてくださいね」
「……あぁ、なのはもな」
「はい！」

俺達はお互い自分達の敵を見ていた。
通路には千を超える敵、反対側には強大な力を持つ英雄。

さっきの様に背後から攻撃されるかもしれない。
けれど俺達はお互いを信頼し、ただ自分の敵にだけ集中していた。

「如月さん、全部終わったら……お願いがあります」
「あぁ？　なんだよ？」

背中越しの会話。
だから俺からはフェイトが今どんな表情で話しているのか解らない。
けれどその声は少し緊張しているようだった。

「内容は、終わったら話します」
「もったいぶってんじゃねぇよ……まぁいい、終わったらだな。無事に終わらせろよ」
「はい！」

そして、背後の気配が変わるのを感じた。

「行きます！　如月さん、また後で！」
「あぁ、頼んだ！」
「「「「「はい！！」」」」」

なのは達は無数の敵のいる通路へと進んでいった。
そして、俺は目の前にいる英雄……いや“英雄達”に集中する。

◆

「フッ、あの状況で怪我一つせず進むとはな」
赤い外套を纏い、先ほどの矢を放った青年【アーチャー】
しかしこの場にいたのは彼だけでは無かった。
奥から数人の人物が歩いてきた。
「不意打ちなぞ、無粋な真似をする」
紺色の陣羽織に長大な太刀を帯びた耽美な青年【アサシン】
「しかし有益な攻撃に違いはありません」
バイザーで視界を隠している妖艶な美女【ライダー】
「はっ！　相変わらず誇りのねぇ攻撃だな弓兵」
青い装束に身を包み、紅の槍を持つ青年【ランサー】
「■■■■■■■■■■■■ーーー！」
まるで巨人と見間違う様な、巨大な男【バーサーカー】
「あらあら、あれで死んでおけば楽に逝けたのに。残念ね」
フードで顔を隠し、からかっている様な声で喋る【キャスター】
「醜い雑種が。我の手を煩わせるとは」
金色に光り輝く黄金の甲冑を纏ったもう一人の弓兵【ギルガメッシュ】
「あなた方に恨みはありません」
そして、エクスカリバーの本来の持ち主でもある。
「しかし、私たちは貴方を倒さねばならない」
鎧に身を纏い、凛とした表情でこちらを見つめる少女【セイバー】

八人の英雄達が並び立っていた。
たった一人でも無類の強さを誇る英雄が八人。
はたから見ればさぞ絶望的な状況に見えるのだろう。

しかし俺は笑っていた。
絶望的に見えるかもしれない。
普通に考えて勝てる訳が無い戦い。
何故なら俺の力は制約が多すぎる。

異なる世界の力は同時併用ができないのもそうだが、そもそも俺のイメージはできない事も多い。
俺がイメージできないものは決して発動しないなんて曖昧でいい加減だか……そういうものだから仕方が無い。

例えば反射なら本来はベクトルの変更という能力。しかしそれは高度な演算能力を必要とするが、俺には当然そんな物はない。だから俺は自分に向かってくる物をただ逆方向に反射する、という風に単純な物だと脳を騙す事で使用しているのだ。

そして何より問題なのは、俺の身体能力が上がっていないという事。
障り猫の動きに全くついていけなかったように、俺の身体のスペックは上がっていない。
死なないかもしれないが、気絶程度なら簡単にするだろう。
そうしたら終わりだ……なのは達は後ろから襲われ全滅する。

考えれば考えるほど不利な状況。
けれど俺は不敵な笑みを浮かべ、セイバーを見る。

「いいのかよ？」

そして俺はセイバーに問いかける。

「……確かに我ら英雄がこの様な真似をするなどはおかしいかもしれんが……」

「ちげぇよ」

「……なに？」

そうじゃねぇ、んな事はどうでもいいんだよ。

ただな……

「たった八人でいいのかって聞いてんだよ！」

そして……最後の戦いが始まった……

16話　信頼（後書き）

天使「……だからアニメ化してないラノベを出すなと……」
作者「……やりたかった事その2です」
天使「しかも能力じゃないから、気づかない人の方が多いんじゃない？」
作者「え～、わからない人に説明しますと、最後のセイバーとの会話（「いいのかよ？」～「たった八人で～」）は某ライトノベルの主人公の決め台詞です」
天使「実際はもっと言葉使いが綺麗だけどね」
作者「このネタは敵が多いほうがカッコいいので当初は敵を1万ぐらい出そうとしたのですが、ザコが多くても盛り上がらない！　って事でフェイトの英雄達を敵にしてみました」
天使「ってか、これ勝てる方法あるの？」
作者「……気合で……頑張る」
天使「……ぉぃ」
作者「それは冗談として、この作品はコメディーメインです」
天使「何を今更？」
作者「戦闘シーンに過度な期待はしないでください」
天使「……ようは文章が下手糞だけど勘弁してねって事よね」
作者「うわぁぁぁぁぁぁん！！」

17話　その力はどこまでも広がっていく（前書き）

……苦情は受け付けません（キッパリ）

17話　その力はどこまでも広がっていく

「こんな事がっ！？」

ライダーは焦っていた。
目の前の現実が理解できず、混乱したまま逃げ回っていた。
しかしそれにも限界が近い。
いくら英雄といえど体力に限界はある。
永遠に逃げ回ることはできない。
徐々に押し寄せてくる死の恐怖にライダーは追い詰められていた。

「一体何が！？」

そしてライダーにはこの状況を想像する事もできなかった。
それがまたライダーの疲労を増幅させている。

――未知の恐怖。

それぐらい異常な光景だったのだ。
そして気づけば眼前には無数の剣が迫ってくる。
そして背後からも……無数の剣が迫っていた。

……もうどこにも逃げ道は無かった。

◆

「こんな馬鹿な真似が出来るわけが……」

キャスターはライダーと違い、状況を理解していた。
こんなふざけた状況でありながら、それでも魔術師として理解する事はできていたのだ。
しかし理解していたからこそ、その恐怖に全身が包まれていく。
私たちは英雄であり、人間以上の存在である。
その英雄に対してこんな真似ができる人間がいるなんて想像もできない。

キャスターは空を飛ぶ事で距離をとっていた。
そして、走り、逃げ回るライダーに目をやると、周囲には無数の剣が迫っているのが見えた、最早回避はできないだろう事をキャスターは悟る。

ライダーは消滅する……そしてそれはキャスターの孤立を意味していた。

「どうやって!?　貴方は何をしたのです!?」

状況の理解はできていた。しかしそれでも理解できないのはどうやってこの状況を作り上げたのか。それが理解できず、キャスターはこの状況を作り上げた張本人に言葉を投げる。

「そんな事気にしてる場合か?　さっさとケツ振りながら無様に逃げろよ……じゃないと死ぬぜ?」

そう、そんな言葉を発している間もキャスターは追い詰められていた。
空を飛んではいるが、それだけで逃げれる程容易くは無い。
たとえ空を飛んでいようと、彼らには攻撃する手段が存在する。

「ゲイ」
「エクス」

周囲の空間が巨大な魔力で圧迫される。
二つの宝具が同時に発動しようとしていた。

「ひっ！」

その巨大な力。そして自らに近づく死の恐怖に小さな悲鳴がキャスターの口からこぼれた。

「ボルグ！」
「カリバー！」
「いやぁぁぁぁぁ！！」

巨大な光が周囲を包み、キャスターは地に落ちていった。
瞬間的な消滅を逃れたのは魔力抵抗の高さゆえか。
僅かに意識の残るキャスターが最後に目にしたのは……巨大で無骨な斧と、洗練された美しい日本刀の姿だった。

◆

ライダーとキャスターは消滅し、その場には残りの六人の英雄が残っていた――如月千早に膝をついた状態で。

「はっはっは、よくやった」

英雄達は仰々しく頭をたれる。

『……アンタ、何やったのよ』

『くくくっ、見たか！　これがギアス！　“絶対遵守の力”だ』

目の見えないライダーとキャスターには聞かなかったが、予想以上の効果だった。

どんな相手にも目さえ見えれば命令を聞かせることのできる能力。

同じ相手には二度通用しないが、今は一度で十分だった。

『何よその反射以上の最悪な能力』

『あぁ、さすがに俺もここまで上手くいくとは思わなかったが』

とはいっても欠点はある。

さっきの戦いも実は紙一重だったのだ。

『……そうなの？　楽勝だったじゃない』

『あの二人が混乱していたからな、他の英雄を無視して俺だけを狙ってきたら危なかったのは間違いない』

そう、ギアス発動中は俺は他の能力は使えない。

その為、一時的に俺は無力な一般人と同じになってしまう。

かといってギアスのイメージを一度解いてしまうと、同じ相手には二度効かないという制約に縛られ、ギアスは無効になってしまう。

『成る程ね。例えばキャスターが遠距離から魔法使ってきたら対抗策は無かった訳ね』

『そういう事だ。ギアスを解くともうギアスは使えない。かといってギアスのイメージを保持し続けて魔法を受けていたら、俺は気絶していただろうな』

まぁようはあの二人が脳無しの馬鹿だったってこった。

『あれ？　なんで障り猫の時はやらなかったのよ？』

『……速すぎてあいつの目を捕らえる自信が無かった』

『……ホントに？』

『……卑怯すぎる気がしてな』

『……何を今更』

まぁいいだろ。勝てばいいんだよ、勝てば。

『あぁ、なのはちゃんの事があったから手段を選ばなくなったと、そういう理由ね』

脳内で妄想が激しいクソビッチがなにやらほざいてる気がするが虫だ、虫。

『……字が違う』

「お前らよくやった」

「「「「「はっ」」」」」

英雄達が一糸乱れぬ返事をする。

まるで訓練された騎士のようだ。

「もう用は済んだ、全員消えろ」

「「「「「「はっ」」」」」」

そして再び一糸乱れぬ返事が返ってくる。
そして英雄達の姿はぼんやりとその場から消えていった。

『うっし、じゃあクソガキ共を追うか』

これでこの場は済んだ。
後は最後の――

『その必要は無いわ』
『あぁん？』
『もう戦いは終わったわ』
『そうか、クソガキ共はプレシアの所に辿り着いたのか？』
『えぇ』
『んじゃあ、そのプレシアとかいうババァの姿でも拝みに行くか』
『だからその必要は無いのよ』
『なに？』

やけに冷たい口調の天使の言葉に違和感を感じる。

『もう戦いは全部終わり。帰りましょう、アースラに』

その口調は冷たく、その態度はどこまでも無関心な物だった。

17話　その力はどこまでも広がっていく（後書き）

作者「苦情は受け付けません（キッパリ）」
天使「アホかぁ！　前回までさんざん引っ張っておいて何よこの展開！」
作者「計画通り！」
天使「死ねぇ！　死んで読者に謝れぇぇ！」
作者「えぇ、前回の後書きで言ったじゃん。この作品はコメディーメインであり、戦闘シーンに過度の期待をしないで下さいって」
天使「限度があるわ！　ギアスって……ある意味一番やっちゃいけない能力じゃない！？」
作者「……そうなんだよねぇ、前から無印以降を書く予定がありませんって言ってたのは、実はギアスのせいなんだよね……あまりにもチートすぎて話が浮かばない（苦笑）」
天使「馬鹿ね」
作者「……うっさい、一応イメージの力を弱体化する事で、原作よりは制約が多くなってるけど、それでもチートすぎるよなぁ……」
天使「ってか、Ｆａｔｅキャラって出オチよね……」
作者「……ちなみに感想でＦａｔｅキャラの質問を無回答としたのは、出オチキャラのため、何も考えていなかったからです」
天使「最低ね」
作者「……さぁ、話もいよいよクライマックスです！　次回は遂に真のラスボス登場か！？　お楽しみに～」
天使「これに懲りずに、次回も読んでやって下さい」
作者「お願いしますっ！」

18話　天使が導く世界の果ては

『もうこれから先はアンタは必要ないわ、帰りましょう』

天使は冷たい口調でそう告げてきた。
その口調に違和感を覚える。

『どういう事だ？　まだババァがいるだろう』
『彼女とは戦わないわ、戦わない以上、修正力も関わってこない』
『だから行く必要は無いってか』
『えぇ、修正力の干渉から守る為じゃない行動は控えるべきよ。ここから先は、本来のあるべき流れ。それを変えるのは許されないわ』
『……フェイトはプレシアと会ってどうなるんだ？』
『大丈夫よ。ちょっと辛いかもしれないけど、なのはちゃんもいるしね』
『そうか』
『そうよ』

はぁ、そんな答えで納得するわけねぇだろうが、マジで脳みそねぇんじゃねぇか？

『行くぞ』
『どこへ？』
『プレシアの所だ』
『話聞いてた？　干渉しちゃ駄目よ』
『それは俺が決める事だ』
『アンタが干渉する事によって、未来が変わる可能性もあるのよ』
『元々未来なんて分かるもんじゃねえだろ』

そう、未来なんてわかってたまるか。
そんなもん知ったこっちゃない。

『人間にとってはそうでしょうね。けど私にとって未来は知っているものであり、その未来へ導くのが役目なのよ』
『……』
『分かる？　確かに最初、私はアンタになのはちゃんを殺せと言ったわ。けれどそれは、それしかこの次元を守る方法が無いと思ったからよ。でもアンタは守るといった。だからそれに賭けたのよ。アンタという存在がいてもなお、本来の未来を守るために。だからここから先はもういいの。ここまできたらアンタは何もしなくても本来の在るべき未来になるわ。それに大丈夫。私は遠い未来も知っている。フェイトちゃんはこの時の想いを抱えてまた強くなるわ』
『……うるせぇよ』
『なに？』
『うるせぇっつってんだよ！　クソビッチ！！』
『っ！』
『何が強くなるだ。何が大丈夫だ。遠い未来だぁ？　んなもん知るかボケ！』

おかしいだろうがっ！　泣いてるやつがいたらそれを助ける為の力だろうがっ！！

『まだ子供のあいつが、あいつらがなんでそんな苦しまなきゃいけねぇんだよ！　おかしいだろうが！　これをバネに強くなるだぁ？　アホかボケ！　んなもんより幸せになる事の方が大切に決まってんだろうが！』

弱かろうが強かろうが笑顔でいられりゃそれでいいんだよ。わざわざ心の傷なんか作る必要ねぇだろうが。

『……まぁアンタならそういう態度を取ると思ったわ。なんだかんだ言って優しいのよね』
『知るか。俺はやりたいようにやるだけだ』
『……でも……やっぱり駄目よ』

クソビッチがそう呟いた瞬間、辺りが光に包まれ、頭の中の異物が消え去るような感じがした。

「改めて自己紹介しましょうか、私は天使。ただの天使。固体名は無し。神の御使いであり、この次元をずっと見続けてきた“次元の観測者”でもあるわ」

目の前にはなのは達と同じくらいの真っ白い少女がいた。
肌も髪も瞳も全て真っ白な裸の少女。
よく伝説にあるような天使の輪や、翼なんかは無くただの少女に見える。

「はっ！　全裸で登場たぁ、さすがビッチだな」
「……うん、なんかこう驚きとかは無いのね……いやまぁそんな期待してなかったけど」
「なんだ驚いて欲しかったのか？　それともシリアスになって欲しかったのか？」
「少なくともこんなおちゃらけた空気は違うと思うわよ」

クソビッチは少し疲れたような、呆れたような感じをしてやがるか、そんなもん知っちゃこっちゃねぇ。

「いやだね、てめぇ相手にいつもと違う雰囲気なんか出せるかよ。大体なんだよその格好は、天使だったら天使らしく羽ぐらいつけて

こいよ」
「この姿の私は人間と同じだから、それよりアンタに一つだけ言っておくわ」
「なんだよ？」
「アンタ……もうイメージは使えないわよ」
「は？　なに言っちゃってんの？」
「アンタのイメージは私が補助してあげたから使えた能力よ」
「何だと？」
「アンタは元は普通の人間なのよ？　それなのにあんな能力が使えるイメージできる筈ないでしょ？　反射に必要な高度な演算が出来る自分が想像できる？　テレポートに必要な十一次元とか分かってる？　魔力を持ってないのにどんなものか本当にイメージできていたと思う？」
「今の俺には能力が無いってか？」
「いいえ、アンタの不死は本当だしイメージの力もある。けどあるだけよ。それを活かす事ができないってわけ」
「……ちっ」
「私の能力は言葉、ただの詞（ことば）、けれど昔から神の御使いである天使の言葉を人々は信じ、信仰してきた。これは力ある言葉よ。その言葉のお陰でアンタはイメージの力を使える事ができた。私がアンタのイメージを否定せずにできるって言い続けてきたからね。けど今は逆。アンタはもうイメージは使えないって言い続けてあげるわ。そして」
再び目も眩むような強い光が天使を中心に生まれた。
そしてその光は俺と天使を中心にして周囲数メートルをドーム状の形で覆っている。
「そしてこの光の幕から普通の人間が出るのは不可能よ」
「面倒な真似しやがって」

「どう？　テレポートしようにも使えないでしょ？」
「……うるせぇよ」
確かに使えねぇな。
ちっ、厄介な真似しやがって。
俺の反応に何が面白いのか、天使は僅かに笑みを浮かべてやがる。
「アンタ独りではイメージは使えない。力が無いアンタではここから脱出する事はできない」
「……そうかよ」
「暫くここで休んでいなさい。もうすぐ終わるわ。そうしたら出してあげる」
「一つ聞きたい」
「なに？」
「どうしてお前はそこまで“あるべき未来”とやらに固執するんだ？」
それが一番不思議ではあった。
今更だが、こいつは何なんだろうな？
「それが私の存在する理由だからよ。私はこの次元が生まれたと同時に存在している。数え切れないぐらいの年数を見てきたわ。それこそ何億年、何兆年といった次元でね」
何か急に話のスケールがでかくなったな。相変わらず妄想の激しい奴だ。
「私はずっと見てきたのよ。人の絶望していく姿を。生まれてすぐ、そもそも生まれる前にこの世界から消えていく魂だって沢山あった」

少しずつ、少しずつだが、言葉に感情がこもってきているのを感じる。
それは、苦しんでいるようで怒っているようで諦めているようで……泣いているように見えた。

「……ずっと私は見てきたわ。決められた未来をずっと見てきた。幸せに生きている人が絶望に変わる瞬間なんてのも数え切れないぐらいあった。けれど、私は干渉する事はできずに、ただ黙って見ていたわ。ほんの少し、ほんの少しで未来は簡単に変わるのに……簡単に救える魂を、私はずっとただ見てきたわ」

その言葉は、まるで自分に言い聞かせているようだった。もう天使は俺の方を見ていない、視線は虚空を彷徨っている。
そして懺悔するように天使は言葉を続ける。

「そんな中、アンタというイレギュラーが現れた。私の知る未来を壊す存在……私が初めて干渉を許された存在。そしてアンタを利用すれば私はいくらでもこの世界に干渉する事が出来る。救われない魂を救うことが出来る……」

そこまで言葉を続け、悔しそうに、辛そうに、言葉を続ける。

「けどそんな事は許されない！　じゃなきゃ今まで死んできた、消えてきた魂になんて言えばいいの！　いまさらなのよ……私はもう変わる事はできないのよ！」
「……うるせぇよ、黙れよクソビッチ」
「何よ！　何でアンタはいっつもそうなのよ！　私がどんな思いでなのはちゃんを殺せって言ったのかわからないくせにっ！　未来を変える事にどれだけ悩んだか知らないくせにっ！　アンタこそ黙って私の言う事聞いてればいいのよっ！！」

「黙れっつってんだよ！！」
あぁマジでうぜぇ。こいつこんなうぜぇ奴だったかよ。
「てめぇの事情なんかしらねぇよ。初めに言った筈だ。俺は俺のやりたいようにやる」
「ははははっ、やれるもんならやってみなさいよ。力を使えないアンタがやれる事なんて何も無いけどね。アンタにはもう何の力も無いのよ、静かにそこで座ってる事しかできないのよ！」
本当にさっきからしつこいぐらいに、俺に力が無いと言い続けてくるなこいつは。
その言動にイラつきよりも先に違和感を感じる。
「今のお前は人間なんだな？」
「そうね。厳密には少し違うけど、そう思ってもらってかまわないわ」
「どうしてだ？」
「……何が言いたいの？」
「なんでわざわざ人間になる必要がある、脳内にいればいいじゃねぇか？」
そう、脳内にいたほうが逆にこっちの思考を読みやすい、わざわざ人間の姿になってそのメリットを消す必要は無いはずだ。
「この姿じゃないと、光を創れないからよ」
「嘘だな」
「っ！」
「あぁ、その反応で十分だ」

本当に嘘かどうかは確信は無い。
だが今の反応で十分分かった。
「嘘を吐きなれてない奴の言う事なんかすぐにわかんだよボケが」

――そして俺は光の幕から姿を消した。

◆

「……やっぱり無理だったわね」
結局アイツはテレポートで脱出した。
「足止めはたった数分、いや数分もできたというべきかしら」
そもそも言葉だけでそんな事ができるなら最初からしている。
私の言葉になんて何の力も無い。
ただ人間にならなければ嘘を吐く事ができない……だからこそ私は

存在を天使から人へ作り変えた。

けれど、アイツのあの表情は少なくとも一回は能力の発動を失敗している。

だったら一応意味はあったのだろう。

（正直意外だったけどね）

そう、意外だった。

ここまで小細工をしてみたはいいけど、無意味に終わる可能性の方が高かった。

私の言葉になんて何の力も無く、イメージは元々アイツの力だけで発動させていたのだから……にも関わらず、能力は発動しなかった。

結局の所

あれだけ暴言を吐きながら

あれだけビッチだとかいいながら

……アイツは

――私を信じていたのだ。

「ふふっ」

その事実に気づいて、思わず噴出してしまった。

あいつは私が“力を使えない”という言葉を馬鹿正直に信じたのだ。

その結果として本来イメージできる筈の物ができなくなり、力の発動に失敗しただけの事。
あの捻くれた男が私の言葉を信じていたなんて、なんておかしな話だろう。

けれどそれももう終わったのだ。
これから先、私の言葉をアイツが信頼する事はないだろう。
一度とはいえ嘘を吐いたのだ。
軽い冗談ではなく、本気で嘘を吐いて……騙そうとして……失敗した。
もう元の関係に戻る事はできない。
私の言葉をアイツが信用する事は無い。
その事実が少しばかり胸を痛めた。

「……アンタが描く未来は……素敵なものになるといいわね」

未来は私の手から離れていった。
私はずっと未来は変わらないと思っていた。
観測者として変わらない世界を、知っている物語をずっと見続けているだけだと思っていた。けれどこの先は違う。少なくともあいつの関わる未来は私には分からない。
……それは私の観測者として存在する意味が消えた事を意味する。
未来は変わっていく、そしてそれは私の知らない所で変わっていくのだ。

私がアイツに干渉する事ができなくなってしまったから。

……そう、できなくなって……しまったのだ。

「……なんでだろうね」

気づけば……私の瞳からは涙が溢れていた。

「……やっとあんな奴から離れられたのにね」

決められた未来へ導くのが私の務めだった。

けれどアイツと出会ってからはそれもままならなくて、分からない事だらけで、アイツは酷い事ばっかり言って、おかしな行動ばかりして、何故かなのはちゃんやフェイトちゃんと仲良くなったりして、そして私は……何故だか信頼されていて……

「……あぁ」

やっと気づいた。

「……そっか」

私は……

「……楽しかったんだね」

初めて、私は楽しいと思える居場所にいたんだ。

未来が分からなくなって、

それでもそれが楽しいと思える場所に私はいたんだ。

「……は」

けれど……

それは壊れてしまった。

壊したのは……誰でもない私なんだ。

そしてそれはもう……

「……ははは」

戻らないんだ。

――あの居心地の良かった時間は……もう戻らない。

私が……全て壊したから。

自分で壊した――

「わあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

一人の少女の悲痛な泣き声は、静かな空間を切り裂いていった。

19話　あぁ、本当にイライラする

「ちっ、めんどくせぇ真似しやがって」

ぼやきながらも先を急ぐ。

あのクソビッチの言う通りならそう時間は無いはずだ。

「やりたいようにやるって言っただろうが、あの馬鹿は。ったくマジで脳みそ無ぇのかよ」

誰も聞いていないのは分かってるが、それでも言わずにはいられなかった。

「ちっ！　クソみてぇな嘘まで吐きやがって。何がイメージは使えないだよボケがっ。全然使えんじゃねぇか」

まぁ、あいつの言葉で一時的にとはいえ本当に使えなくなった俺も俺だが。そんなしょうもない嘘を言いやがったあの馬鹿には本当にイライラする。

「全部終わったらぜってぇ殴る。殴り倒す。むしろ殺す」

そんな怒りの言葉はいつまでも止まらなかった。

◆

「いまさらあなたを娘と思えというの？」

「あなたがそれを望むなら。それを望むなら、私は世界中の誰からも、どんな出来事からもあなたを守る。私があなたの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだから」

フェイトは思いのたけをプレシアにぶつけていた。その瞳に迷いは無く、猫になった時のような弱弱しさは感じられなかった。まるで別人のような強さが感じられるフェイトの姿を見て、ガラにもなく嬉しく感じた俺の表情には自然と笑みが浮かぶ。

……けれどそんな強くなったフェイトを見ても、そんな力強い言葉を聞いても……プレシアは変わる事は無かった。

もしかしたら変わっているのかもしれない。けれど付き合いの無い俺にはそれを判断する事は出来ない、こんな時あのクソビッチがいればと思うが無いものねだりしても仕方が無い。

これからする事はもしかしたらフェイトを傷つけるかもしれない。こんな事はするべきではないかもしれない。折角立ち直ったフェイトを再び傷つけてしまうだけかもしれない……天使がいなくなったいま、自分の行動により未来がどうなってしまうのか分からない。正しいのか、正しくないのかそれを知るすべは無い。

そんな迷いが脳裏をよぎる。

けれどだからといって、何もしなかったらそれはただ逃げてるだけだ。

未来なんて分かるわけが無い。

それは俺があの馬鹿に言った言葉。

未来なんて分からない、いつだって失敗して傷つく可能性を秘めている。

それでも、

それでも、分からないからと言って何もしないなんてのは駄目だ。

たとえ傷つく可能性を秘めていても、失敗して泣きたくなるような、死にたくなるような現実が待っていたとしても、それでも俺は――を信じる。

そしてプレシアが自ら地底へ落ちていったその時、俺は行動にうつした。

◆

落ちていくプレシアと、アリシアとか呼ばれていた氷漬けの遺体を空中で抱きしめ捕まえる。

後ろでなのは達が喚いているのが聞こえるが、今は無視だ。ただ落ちてゆくプレシアの瞳を正面からじっと見つめる。

悲しくて哀しい瞳

寂しくて淋しい瞳

あぁ、イライラする。

本当にイライラする

――どいつもこいつも！　そんなむかつく目してんじゃねぇよ！

なのはが封印に失敗した時もそう思った。

フェイトが障り猫にとり憑かれていた時もそう思った。

あの馬鹿も……さっきのあの馬鹿な天使の時もそうだ。

辛そうな、泣きそうな顔してる馬鹿は見ててイライラする。なんでそんなめんどくせぇ馬鹿ばっかりなんだよ！

――泣きたいなら泣けよ、辛いなら辛いって言えよ。もっと、もっともっと自分が素直になれる生き方しやがれってんだよっ！

俺が来た事が意外なのが、プレシアは驚愕の表情をしたまま俺を見ていた。そして俺達は重力に逆らわずに逆さまに落ちていく。全

身に冷たい風を浴びながら、しかし一向に頭は冷えないまま、俺は怒りを隠さずに、隠そうともせずに言葉を紡ぐ。

――力ある言葉を、紡いだ。

「如月千早が命じてやる。プレシア、お前はフェイトをどう思ってるんだ！？　今のフェイトの言葉を聞いて、今のフェイトの姿を見て、お前はまだアリシアとやらのコピーだと、ただの失敗作だと思っているのか！？　必要無いと切り捨てるのか！　答えろっ！　プレシアァッ！」

そして……ギアスは発動した。

19話　あぁ、本当にイライラする（後書き）

作者「次回最終回「なまえをよんで」（仮）です」
天使「ようやくここまで来たわねぇ……って、わたしはどうなるのよっ！」
作者「大丈夫！　作者はハッピーエンド主義ですから」
天使「ほっ」
作者「きっと半殺……じゃなくて虫の息……でもなくて生命活動は保証されますよ。うん、きっと」
天使「全然安心できないっ！？」
作者「ではまた次回！」

２０話　真っ白な世界で（前書き）

ごめんなさい。とりあえず謝っておきます（おい）

２０話　真っ白な世界で

「やれやれ」

プレシアは結局不器用だったのだろう。ギアスの力により本音を聞きだした俺の感想はそこに行き着いた。

「……私は一体」

「疑問は後だ。とりあえずフェイトの所に戻るぞ」

フェイトという言葉に、プレシアの身体がビクンと反応する。最初は、フェイトの前でギアスを使う事も考えたが、それじゃあ意味が無い。あくまでもこいつの、プレシアの意思で、プレシアの言葉で伝えなければフェイトの心には届かない。

……それにこいつの本音がやばそうだったらこのまま落とすって選択肢もあったしな。

まぁ、今はそんな事を考えてる余裕は余り無い。

時速２００Ｋｍ以上の速さ（推定）で絶賛落下中の俺たちはいつ潰れたカエルみたいになるかわからん。

「行くぞ」

お決まりになったテレポートを使う。

「はっ！？」

しかし……テレポートは発動しなかった。

「ちょ、待てよ。どういう事だよこりゃ！？」
「ここは虚数空間よ。全ての魔法は使えないわ」
「いやいやいや、俺のは魔法じゃねぇし」
「どういう事？」
「説明してる時間は――っう！」

そして気づけば俺たちは真っ白な光に包まれていた。

◆

「……どこだよこりゃ？」

幸い地面はあるものの、一面真っ白な空間に一人ポツンと俺は立っていた。あの後気づけばこの空間にいた。しかしプレシアもアリシアの遺体も無かった。

そして何より

「……能力が使えない？」

一番の問題がコレだった。色々と試してみたが何一つ使えなかった。

「どうすっかな」

正直手詰まりだ。せめて誰かいれば話は変わって来るんだが、見渡す限り何も無い。当ても無く歩き始めるが、何も無い真っ白な空

間の中では方向感覚も当てにならず、真っ直ぐ歩いているのかさえ不安になってくる。

「誰か出てこいやボケ、ぶっ飛ばすぞコノヤロウ」

しかしその言葉も虚空に消えていく。仕方なく地面に座り、空を見上げる……真っ白な空を。

「あ～、もう意味わかんね、マジ意味わかんね」

「ホント、アンタは変わんないわね。もうちょっとこう緊迫感とか無いわけ？」

気づけば横に天使が立っていた……相変わらず素っ裸で。

「まだ裸なのかよ！？　どんだけ自分の身体に自信があんだよ！」

「……だからアンタは……」

クソビッチはまた疲れたような声で返してきやがった。

「んで、ここはどこだよ？」

「ここは次元の狭間よ」

「あぁん？　だから日本語で喋れよボケ」

「……本当に、変わらないのね」

何故だかこの馬鹿は泣きそうな顔をしてやがる。

「なんて顔してんだよ。不細工にもほどがあるぞ。死ね」

「どうして？」

「はぁ？　何がだよ」

「あんな事したのに、どうしてアンタは変わらないの？」

「アホかてめぇは。変わってねぇわけねぇだろうが」
「……え？」
呆けたような馬鹿面をしている馬鹿に俺は――
「いたっ！」
思い切り拳骨を落としてやった。
「んなふざけた真似しやがってこの馬鹿が、あの後俺がどれだけイラついたかわかるか！？」
「ははっ」
「何笑ってんだよぶっ飛ばすぞコノヤロウ」
「あははは」
「だから笑ってんじゃねぇよボケ」
「うっさいわね、私の勝手でしょ」
はっ、ようやくいつもの空気に戻りやがった。
「で、ここは何だよ」
「だから最初に言ったでしょ。ここは次元の狭間。他の次元へと繋がる場所よ」
「わかったような、わからんような」
まぁどうでもいいか。
「一緒にプレシアも落ちてきたんだが、知らないか？」
「……プレシアだけじゃないわ、なのはちゃんもフェイトちゃんも、他の3人もみんな落ちてきたわよ」
「は？」

おいおい、そりゃどういうことだよ。

「アンタとプレシアが落ちていくの見て、みんなあそこから離れられずにいたの、そしたら崩壊が始まって逃げ遅れたのよ」

「あいつらは無事なのか？」

天使の口調、表情から悪い空気が周囲を包む。まるで全身に冷水を浴びたような嫌な予感が全身を駆け巡り、そしてその予感は――的中する事になる。

――みんな死んだわ。

その言葉はどこか遠くに感じられた。まるで異世界の言語のように聞こえた言葉、しかしそれは俺の両耳を捉えて離さなかった。

２０話　真っ白な世界で（後書き）

作者「え～、ごめんなさい。前回、「次回最終回」とか言っておきながらもう１話続きます」
天使「……なんでこんな事になったのよ」
作者「１話でまとめようとしたらちょっと長くなりそうだったのと、書いてて一回区切るのが丁度いいかなぁ……と」
天使「なんという計画性の無さ」
作者「申し訳ございません……」
天使「で？　この先は？」
作者「天使はずっと裸スタイルを貫きます（キリッ）」
天使「そっちはどうでもいいのよっ！」
作者「え～、次回こそは最終回（予定）です！」
天使「……予定を消しなさいよ」
作者「最終回（予定）ですっ！！」
天使「……はいはい、ではまた」
作者「宜しくお願いしますっ！」

２１話　その力の源は（前書き）

まだだっ！　まだ終わらんよ！（おい）

21話　その力の源は

――全員死んだ

告げられた言葉は酷く残酷なものだった。俺が正しいと信じてやってきた事は全て無意味だったのだろうか……

「あの時、アンタが大人しく私の言う事を聞いていれば死ぬのはプレシアだけですんだのにね」

天使は歪んだ笑みを浮かべながら冷淡な言葉を放つ。その嘲笑はとても重く、胸に突き刺さった。

「……俺は」

どうすればいいのだろう？

俺の考えは間違っていたのだろうか？　今までやってきた事は……

脳裏に浮かぶ5人の姿。

なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、クロノ。俺のせいであいつらが死んだ。俺のせいで……

「あ”あ”あ”あ”ああああああぁぁぁぁぁぁ！」

俺はこの世界にきて得た物を全て失ってしまったんだ……それも自らの手で。

全身から力が抜けていく。まるで感情というものを全て忘れてしまったように。ただ一つ、苦しみという感情を除いて……

苦しい……胸が押しつぶされそうな程に苦しかった。自分の行動

が招いた結果が重くのしかかる。
俺がこんな馬鹿な事をやらなければ、俺がこの世界にやって来なければ、俺が……いなければ……

「なんて顔してんのよ」

天使はさっきまでの歪んだ表情のまま言葉を続ける。

「自信満々な顔してたと思ったらすぐに落ちこむのね。アンタが言ったのよ？　未来なんて分からないって。その結果がこれ。ただそれだけの事じゃない」
「……」
「反論する元気も無し……重症ね」

反論も何もない。事実その通りなのだから。これは俺の無知が招いた事……俺は受け入れなければいけない。

「どうするの？」
「……」

どうする？　何をどうするんだ？　俺は……どう償えばいい……

「はぁ、アンタは意外と脆いのね。まったく、普段の余裕はどこいったのよ？　このヘタレ」
「……うるせぇよ」
「結局アンタはただのガキなのよ。どれだけ力があっても未熟なのよ。それを自覚しなさいよ」
「……うるせぇよ」
「アンタは未熟。でも、だからこそ、成長する事もできるはずよ」
「うるせぇっつってんだろ！！」

「聞きなさい！　まだ、まだ何も終わってないのよ！」
「なに？」
「はぁ、へたれなアンタを苛めるのも楽しいけど、やっぱりなんか違うわよね」
「話を続けろよ！　終わってないないってどういう事だ！？」
「アンタには力があるでしょ？」
「っ……アホか」

死んだ人間を生き返らせる事なんてできない。イメージには限界がある。俺がずっとイメージし続けるなんてのは不可能だ。

「そうね、今のままじゃ無理よ」
「どういう意味だ？」
「そもそもイメージってどういうものか理解してる？」
「？　俺が想像したものが現実になる力だろ？」
「それがどうやって起きているのかって話よ」
「どういう事だ？」
「いい、ただの一人の人間が想像した事が現実に起こるなんて事、あると思う？」
「……」
「本来こんな事ありえないのよ。けれど今のアンタはただ人間じゃない。魂が次元と同化しているのよ」
「はぁ？」
「アンタは別の次元で死んだ時、本来なら転生の輪に加わるはずだった。けれどアンタは転生の輪から外れてしまったの。その時にこの次元に落ちてきた。普通の魂なら次元に呑まれて消えてしまうんだけど、アンタの魂は消えずに、次元と融合して一体化したのよ」
「……なんだそりゃ」
「だからアンタはこの次元でなら、どんな事だってできる。アンタがこの次元そのものなのだから」

「おいおい、ちょっと待てよ、その割にはできない事が多くねぇか？」
「それはアンタが人間だからよ」
「はぁ？　そりゃ俺は人間だからな」
「次元と融合した時、アンタは無意識に人間であった時の自分の姿を創り直した。その結果人間に戻れたけれど、その分人間の器の限界以上の力を使用する事ができなくなってしまったのよ」
「……」
「アニメとかマンガの力を想像しなさいっていったのもそのせいよ。人間の器では限界がある。だからイメージしやすい力を想像させたのよ」
「なるほどな」

って事はだ。こうすりゃいいんだろ。

「っ！　まだ、話は終わって」

俺はエクスカリバーを右手に作り出す。

――そして自分の首を切り落とした。

最終話　なまえをよんで

「はぁ、アンタは人の話を最後まで聞きなさいよ」
「あぁん？　話が長ぇんだよボケ」
「全く、私がまた嘘を言うって可能性を考えなかったの？」
「言ったろ？　信じるかどうかは俺が決める」
「……そうだったわね」

今の俺は不思議な状態だった。身体の感覚が無く、全身がもやのようにふわふわとしていて何だか落ち着かない。
そんな俺を見上げながら、天使は真剣な表情で言葉を続ける。

「今のアンタは人間という器から解き放たれた存在よ」
「これがねぇ、なんだか落ち着かねぇな」
「すぐに慣れるわよ」
「んで、どうすりゃいいんだ？」
「今まで力を使ってきたのと同じよ。ただし今度はアニメとかを介する必要は無いわ。ただアンタの好きなようにイメージすればいい。この空間でならそれができるわ」
「まるで神だな」
「そうね、神といってもおかしくないわ。今のアンタ、そしてこの次元の狭間でならアンタと魂が直接リンクしているから、なんでもできるわよ。それこそ、この次元を滅ぼす事だってね」
「はっ。そいつはいいな」
「えぇ、好きにするといいわ」
「なんだか急に大人しくなったな。俺を止めようとした時の勢いはどうした？」
「……もう私の役割は終わったから」
「なに？」

「もう私の存在理由が消えてしまったから、どうでもいいのよ」
「どうでもいいって割には、色々教えてくれんだな」
「……」
「まぁいい。俺は俺のやりたいようにやるぜ」
「ふふっ、今度は後悔するんじゃないわよ」
「あぁ、じゃあな」
「えぇ、さようなら」

そして俺はこの真っ白な世界に別れを告げた。

◆

――イメージする
新しい世界を、イメージする
それは本来の未来より、ほんの少し幸せな世界
けれどそれは不公平な行為
他の人間からすればとても不公平な行為
人は失敗したらやりなおせない
後悔してもやりなおす事なんてできない
人生にコンテニューなんてない

世界にリセットボタンなんてない
どんなに辛くても
どんなに悲しくても
人は生きていかなければならない
その重荷を背負って
……けれど
それでも
それでも俺は

――俺が望む世界を創る

俺は神なんて器じゃない
世界に平等になんてできない
俺は人間だから
強欲でどうしようもない人間だから

自分が幸せになるためなら
どんな力だって振るう
世界なんて知らない
他人なんて知らない
ただ俺は
――やりたいように
――――やるだけだ

◆

『はぁ、なんで私はここにいるのかしら』
『あぁん？　何度もうるせぇぞクソビッチ』
『あぁもう！　なんで私がまた頭の中にいんのかって事よ』

『知るかよ、てめぇの知らない寄生虫の能力でも目覚めたんじゃねぇのか？』
『そんなもんあってたまるかぁ！　ってか、暴言吐きながら笑ってんじゃないわよ！』
『はっは、知らねぇな。さっさと行くぞ』
『……今度はどこ行くのよ？』
『なのは達の所だよ』

好きなように世界を創る力。そこで俺が望んだものは、前と同じ環境だった。なのは達が死んだ事は無かった事になり、プレシアもまた生きていた。身体を蝕んでいた病が取り除かれた状態で。
しかしアリシアに関してはどうしようもなかった。俺はアリシアを知らない。知らない人間をイメージして、姿形を同じにしても結局は別人になるだけだ。
俺の力に関しても前と同じ。何も変わらない。何も変えなかった。

『欲が無いねぇ、俺も』
『急にどうしたの？　遂に頭イカレタの？』
『「失せろ」』

俺が言葉を告げた瞬間、辺りに光が満ちた。
ただ、一つだけ変えた事がある。
それは……

「ちょっとどういう事よ！」
「あぁ、ずっと頭の中に居られるのもうざいからな。俺が「失せろ」って言ったらお前は人間の姿に変わるようにしたから」

再び、目の前には素っ裸の天使がいた。

「相変わらず裸なんだなお前は、ちっとは羞恥心とかねぇのかよ」
「今回は私のせいじゃないでしょー！」
「うるさい、「戻れ」」

そして天使はまた俺の頭の中に戻っていった。

『……なにこの使い魔みたいな扱い』
『お似合いだろ、「戻れ」って言ったら戻るからな』
『しくしく』

うむ、特に深い意味は無く思いつきでつけた能力だが、天使にダメージを与えたので良しとしよう。
……つーかいい加減、天使天使ってのもなんだかうざいな。

『よし、お前に名前をつけてやろう』
『はっ？　何よ急に』
『いい加減、天使とかクソビッチって呼ぶのも飽きてきたしな』
『そんな理由で！？』
『何がいいかな、天使……エンジェル……アンジュ……』
『……すっごい嫌な予感がするんだけど』

よし、これだな。

『……何よ？』
『マッパ』
『アホかぁぁぁぁぁ！！　それまで呟いてた天使って言葉が何も活かされてないじゃない！』
『やれやれ、人の気も知らないで。マッパよ、もう少し大人になりなさい』
『早速マッパって呼んでんじゃない！』

『お前が自分で言ったんだろう、存在理由が無くなったって。だから俺は新しく生まれ変わって欲しいと思ってこの名前を送ったんじゃないか。マッパ、つまり全裸。これは今までの自分を脱ぎ捨てて新しい自分になって欲しいという願いが込められた名前なんだぞ』
『そ、そうだったの……ごめんなさい』
『（こいつ馬鹿だ）』
『で、でもその名前はちょっと止めて欲しいというか、さすがに辛いというか』
『我侭だなマッパは、仕方ない新しい名前をつけてやろう』
『ほっ』

ならマッパを変化させて

『マッチで』
『……その心は』
『マッパ＋ビッチ』
『うがぁぁぁあ！！！』
『おいおいマッチ、女の子がうがぁとか言ってんじゃねぇよ』
『やっぱり適当じゃない！』
『その通りだが？』
『開き直るなぁぁ！　ちょっと小首を傾げて不思議そうな顔で開き直るなぁぁぁ！』

「如月さ～ん！」
「ん？」

公園でマッチを弄っていたら遠くからなのはがやって来た。
その後ろにはフェイト。そのまた遠くのベンチではアルフとユーノ、クロノが座っていた。

「目、赤いなどうした？」
「あはは」
「なのは、待って」

少し遅れてフェイトが追いついてきた。
……そういやこいつがなのはを名前で呼んでるのって初めてじゃねぇか？

「そうか」
「はい？」
「なんでもねぇよ」

上手く行ったって事だな。今回俺は世界を創り直した時、ただ死んだという事実を無かった事にした。こいつらの気持ちや記憶は一切いじっていない。だからこれはなのはが上手くやって事だろう。

「あ、あの！」
「なんだ？」
「え、えっと」
「あぁ、そういやお願いがあるとか言ってたな」
「はい！　あの、その」
「フェイトちゃん頑張って！」
「えぇっと」
「あぁ、もううぜぇ。さっさと言えよぶっ飛ばすぞコノヤロウ」
「千早さん！」
「……なんだよ？」

いきなり名前呼びかよ。

「な、なのは」

「にゃはは、きさら、じゃなくて千早さん」
「お前もかよ！」
「私達と友達になってください」
「はぁ？」
「あ、あの、なのはが友達になるのは名前を呼ぶ事だって。それでその」

そういう事かよ。いきなり名前呼ばれても伝わんねぇよ。コミュニケーションの取り方勉強して来いボケ。

「ご、ごめんなさい！」

『口に出てるわよ』
『イージーミスだ』

ったく、今更な話なんだよ。

「はぁ、俺は前から名前で呼んでるぞ、なのは、フェイト」
「あ、あははっ、そうでしたね。千早さん」
「え？　え？」

やれやれ、フェイトもちったぁ変わってんだろう。自分からこんな風に前に出て話すなんて今までした事なさそうだしな。

「済まない、時間だ。そろそろいいか？」
「……空気よめよ」

いたよここに空気読まない奴が、死ねよボケ。

「はい」

「……フェイトちゃん」

俺は歴史を変えなかった。こいつの、いやこいつらの罪状をそのままにしていた。

『なんで変えなかったのよ』

『……自分がやってきた事を見つめなおす機会ってのは必要だろうからな』

『……そうね』

プレシアは既に向こうへ行っているらしい。罪は重いらしいが、事前にリンディ艦長には上手くやってくれるようお願いしていた。

『脅迫の間違いじゃないの？』

『交渉だろ』

ちょっとした武力交渉ってやつだ。

「プレシアとは、話せたのか？」

「いえ、まだほとんど話せてません。……というより避けられてるみたいで」

う、うぜぇぇぇ！　あのババァさっさと素直になれよ。

「でも」

「あぁん？」

「一言だけ……貴方は私の娘よって、言ってくれました」

「……そっか」

圧倒的に言葉は足りない。けれど今はこれが精一杯ってか。

「これから、少しずつ頑張っていこうって思います」
「あぁ、頑張れよ」
「はい！」

時間はある。あの時失った筈の未来があるのだから。

「じゃあ、行って来ます」
「あぁ、またな」
「またねっ！　フェイトちゃん」

そして、フェイトはアルフと一緒にクロノの作り出したゲートで行ってしまった。
消える最後の瞬間まで、なのはは手を振っていた。最後の最後まで振り続けていた。
そして、いつまでもフェイトが消えた場所を見つめていた。その瞳の先は、きっと再開の日を想像（イメージ）している事だろう。それはきっとそう遠くない未来の日。きっとすぐに会えるさ。なぁそうだろ、フェイト――――。

『それで、これからどうするのよ？』
『あぁん？　一段落したしな、ゆっくり休むに決まってんだろ』
『どこで？』
『は？』
『どこで休むの？』
『……』

わ、忘れてた。

『はぁ、世界を創り直す前に、自分の家を作りなさいよ』
『うるせぇよ、黙れマッチ』
『マッチ言うな。しょうがないわね、またなのはちゃんのベッドに行きましょう』
『……』

最悪だ……

『ほらいくわよ、千早！』
『最悪だ……』

そしてまた、世界は日常へと帰っていく。
ささやかな幸せが待つ日常へと帰っていく。

（魔法少女リリカルなのは～転生者は暴言ばかり～　終）

最終話　なまえをよんで（後書き）

作者「おわったぁぁ！！」
マッチ「おつかれ～！！」
作者「いや～、終了予告してからだらだらと延びていましたが、無事に完結する事ができました」
マッチ「当初の予定から大分のびたものね」
作者「始めた当初は、１５話程度を予定していたんですけどね。まぁ無事に終われて何よりです。これも読者の皆様の応援のお陰です。皆様本当にありがとうございました」
マッチ「で、なんか次があるとかほのめかしてたけど、実際どうなの？」
作者「はい、次回作はありますよ！　別シリーズという事で改めて連載を始めますが、そっちの方もよろしくお願いします」
マッチ「どんな話なのよ？」
作者「というわけで、後書きでなんですが、次回シリーズ予告です」

◆

それは突然の判決だった。

――プレシアの死刑が決まったわ

そんなリンディ艦長からもたらされた情報は、如月を怒らせるのに十分なものだった。

「ふざけんなよ！　殺すために助けたんじゃねぇんだよ！」

如月は一人（脳内にもう一人）プレシアを救出しに向かう。

しかしそこで思いもよらぬ人物と出会う事となる。

『どうして……こんな……』

如月は知らない。彼がここにいる事がどれほどの異常事態なのか、如月はまだ知りうるはずがなかった。ただ、未来を、以前の未来を知る天使だけは知っていた。これがどれだけの異常事態なのかを。

「初めまして、私はジェイル・スカリエッティ」

「聞いてねぇよボケ」

彼は１０年後の姿でそこに立っていた。

――これは本来交わる事の無い物語

――未来であり過去でもある、そんな２つの物語

魔法少女リリカルなのはＡ' ｓ×ＳｔＳプラス～時を紡ぎし暴言者～

「助けて……なのはママ」

「ま、ママぁ！？」

高町なのは（９歳）一児の母になりました。

――２０１１年連載開始予定

◆

作者「え～、今回はマジ予告です」
マッチ「……マジなんだ」
作者「登場予定キャラは、A' sキャラはほぼ全員、StSからは、スバル、ティアナ、ヴィヴィオ、スカリエッティ、クアットロかな」
マッチ「StSから少なくない？」
作者「基本はA' s主体です。エリオとキャロは出しても空気になりそうだったので、外しました（笑）」
マッチ「かわいそうに……」
作者「来年1月末頃から連載開始予定です。少し間が空きますが、正月までリアルが多忙&他の作品もいい加減進めたいので、少々お時間を下さい」
マッチ「よろしくお願いします」
作者「では、皆さんまた会う日まで！」
マッチ「って、終わる前にいい加減突っ込むけど……本当に「マッチ」で決定なの？」
作者「いい名前が思いついたら変えるけど、今の所これでいいかなぁ……と。読者の皆さんから何かいい名前案が来たら変わるかもしれません」
マッチ「しくしく」
作者「え～、ぐだぐだですが、そんな感じで次回作もよろしくお願いします！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1699n/

魔法少女リリカルなのは～転生者は暴言ばかり～

2010年11月21日10時49分発行